

書評

垂水千恵著

『台湾文学というポリフォニー — 往還する日台の想像力』

岩波書店、2023 年、290 頁

鏡像が交差する台湾文学論

山口 守

はじめに

これまでの著者の研究書で言えば、日本語文学という概念を提案、確立する上で大きな貢献を果たした『台湾の日本語文学』（五柳書院、1995）や、マクロとミクロの視点が交じり合う作家論として画期的であった『呂赫若研究』（風間書房、2002）のように、著者は常に台湾文学研究を最前線で切り拓いてきた。本書はそうしたこれまでの研究蓄積の上に立って、台湾からの、また台湾への眼差しが反映する鏡像として文学作品を捉え直し、21 世紀の現時点で台湾文学を解読し、考える際に不可欠な多くの視点を提供することで、今後の台湾文学研究の発展へと繋がる意義を持っている。

書名に使われるポリフォニーとは、音楽で言えばバッハの作品のような多声音楽を指すが、文学研究で言えば、百年ほど前のミハイル・バフチンのドストエフスキー論のように、作品内で交錯する複数の声や意識に注目した対話論的立場を指すのが一般的である。本書は著者が台湾文学におけるその多声性に注目しつつ、日本と台湾でどのような想像力や眼差しの交差、交錯があり、そこから鏡像や転移が生じたかに焦点を当てた研究である。そこに見られる独創性として、台湾文学が発するポリフォニーだけでなく、そこから聞き取るポリフォニーへ、更には台湾文学を論述するポリフォニーまで進んでいることが挙げられる。そもそも台湾文学を語るには、必然的にポリフォニックにならざるを得ないことを体現している研究書と言ってもいいだろう。

各章の概要と意義

国際学会における著者の研究発表をもとにした各章の内容を俯瞰すると、序章と終章を除いた全 12 章の各論のうち、日本人作家を扱った章が 6 章、台湾出身作家を扱った章が 5 章、両者を比較して論述する章が 1 章と、まず形式や論述対象からもポリフォニーが奏でられている。

第 1 章は台湾の左翼作家楊逵を取り上げ、その日本語創作にどのような戦略があり、当時の日

本文壇の動向を熟知した上でどのような叙述戦略を構想したか、更にはそこから生じるジレンマについて述べる。ここでは楊逵が編集を中心的に担っていた『台湾新文学』が1937年6月に時局の影響から停刊を余儀なくされた後、四ヶ月にわたって日本に滞在した時期の活動が楊逵研究で空白になっていることを受けて、まず1934年の「新聞配達夫」による日本文壇デビューから1936年にかけて展開された楊逵の評論活動から分析を進める。その際のキーワードは社会主義リアリズムである。日本における社会主義リアリズム論争に関して、楊逵は日本の左翼作家への建設的批判を表明する一方、植民地においては「読者としての大衆」に注目する必要を訴える。ところがそこに楊逵が直面せざるを得なかった啓蒙と普及をめぐる矛盾と葛藤を著者は見出す。それは、日本国内の読者大衆と異なり、植民地台湾で日本語リテラシーを身につけた読者大衆を望めば、統治者による日本語普及の進展を前提とせざるを得なくなるジレンマである。著者は楊逵がそれを克服しようとした意図を、貴司山治や中西伊之助との交流から探ろうとする。例えば貴司山治が採用した文学雑誌の無料提供という方法が、『台湾新文学』創刊にあたって誌友方式の採用として応用されたことを指摘する。中西伊之助については、楊逵の人民戦線支持と結び付けて言及されるが、全面展開されるのは次の第2章である。

第2章は楊逵と交流のあったプロレタリア作家中西伊之助を取り上げ、今度は日本の側からの台湾表象を論じる。中西伊之助の長編の台湾旅行記『台湾見聞記』(1937)は、なぜかこれまで論じられることが少なかったが、本章はその研究の空白を埋めてくれるものとして意義がある。帝国日本のもう一つの植民地である朝鮮での投獄経験をもとにした小説『赭土に芽ぐむもの』(1922)で名を成した中西伊之助が、1937年4月から12月まで台湾に滞在して『台湾見聞記』を執筆、刊行したことが著者の考証で明確になったばかりでなく、その滞在の終わりが第一次人民戦線事件にかかわる台北での検挙にあったことも明らかにされる。その『台湾見聞記』に登場するY君が楊逵であったことを解説しながら、著者はそこから楊逵の人民戦線支持の政治的立場へと論を進めていく。ただし一方で著者は、『台湾見聞記』を左翼作家の植民地体験記として評価しながらも、そこに帝国の眼差しが潜んでいる可能性についても触れている。

この帝国の眼差しの問題は、第3章で日本人作家大鹿卓の作品における台湾原住民族表象を論じる中でいっそう明確に分析される。大鹿卓の「野蛮人」(1935)は1920年のサラマオ蕃事件を背景とした作品だが、文明と野蛮という既成の二項対立を脱構築する可能性に触れながらも、著者はレイ・チョウの『プリミティヴへの情熱』を参照して、大鹿卓の作品に潜むプリミティヴ憧憬が女性への征服欲と一体化していることを指摘する。更にこの問題を山部歌津子『蕃人ライサ』(1931)の女性表象で論じることで、作家の眼差しの分析が、叙述のポジショニングの検討と関連してくる。そもそも山部歌津子とは誰かという謎がある。著者は井上伊之助との交流、和歌山県新宮という場所、大逆事件、佐藤春夫との関係など多方面から考証を行って、山部歌津子は沖野岩三郎ではないかという推定を提示する。そうなるとレオ・チンが論文「思考不可能性としての霧社事件」で鋭く指摘しているように、日本人作家が描き出す台湾表象、とりわけ原住民族女性表象に感傷的理想化、つまり文明・野蛮、また支配・被支配という植民地的差異の再生産が見られるという結論を導き出すことが可能になる。ただし、著者はそこに留まらずに、様々なエク

リチュールの微小な差異に注目することで、帝国の歴史的責務への免罪とは慎重に一線を画しながら、その差異の原因を探ることで台湾文学研究の深化を図ろうとする。今後の研究発展へと繋がる示唆に富んだ指摘と言えよう。

第4章ではその小説『蕃人ライサ』の舞台となった新竹が、戦後日本の推理小説家日影丈吉の「騒ぐ屍体」(1963)の中でどのような物語空間として設定されるかを扱う。ここでは時代的文脈を異にしながらも、作品の台湾表象が幕のように台湾人の実態を隠していることを解説する。そもそも怪しく、不明で、神秘的なイメージを喚起するために帝国の作家によって植民地が利用されるのは、推理小説では定説となっているが、著者はこの謎解き小説の、更に奥のトリックまで解き明かしてくれる。例えば、正体の分からない男の「はっきりしない」日本語に犯行を隠すトリックがあることなど、推理小説を更に推理するのでなければ読み解けない知的謎解きに満ちている。そこに1944—46年の台湾滞在で「その自然にも人間にも、一瞬の停滞もなく流動する実体という感じを持った」日影丈吉が、異なる他者として息づく台湾を表象しようとする意志を読み取るのである。

第5章では、これまで述べてきた台湾表象の問題について、女性作家に注目して論じている。ここで取り上げられるのは、幼少時から青年期にかけて台湾滞在の経験を持つ日本人女性作家真杉静枝である。ただし、その作品を論じるのではなく、真杉静枝が他の日本人作家からどのように描かれるのかというユニークな手法で論が進められていく。例として挙げられるのは火野葦平「寂しきヨーロッパの女王」(1955)、石川達三「花の浮草」(1965)、林真理子「女文士」(1995)の三作品だが、特に前二者の男性作家のミソジニー言説の原因を、旧帝国の男性作家の敗北感、挫折感に見て、二作家が真杉静枝を描きながらも台湾を意図的に回避する点に、逆に台湾体験への偏見が表れていることを指摘する。植民地体験を女性の性的解放感と結び付け、デラシネを日本への忠誠の欠如と捉える二人の男性作家と対照的に、女性作家林真理子は真杉静枝の台湾体験を取り上げて、豊穡な南方のイメージを自由奔放さへと結びつけるが、その台湾表象の元となる植民地の歴史までは筆が及んでいない。真杉静枝が自らの台湾体験を通じて感受した台湾の人々と生活をどのように作品化したか、それは意義ある研究テーマであるとの著者の見解は十分に首肯できる。

第6章、第7章は逆に台湾作家が日本語を駆使して創作する中で、日本や台湾がどのように表象されるかという、文字通りポリフォニックな視点からの分析となっている。まず第6章で取り上げられるのは、日本文壇で活躍した邱永漢と、植民地統治終了後も台湾で日本語創作を継続した黄霊芝である。ここでは亡命というポジションがキーワードとなるが、邱永漢は空間の亡命者、黄霊芝は時間の亡命者というのがふさわしいかもしれない。二二八事件後に香港経由で日本へ亡命した邱永漢は、台湾独立運動に献身する廖文毅や王育徳と交流を重ねつつ、『香港』(1955)で直木賞を受賞するなど、当初は文学畑で活躍した。著者の分析によれば、デビュー作『密入国者の手記』(1954)に象徴的に表れているように、邱永漢が想定する読者の中核は日本人知識人であり、旧宗主国としての責任を放棄して台湾を中国の国内問題へと移し替えた日本人に対して、痛烈な批判を込めた作品をいくつも発表している。それが1960年代になると文学から離れて経

済分野で活躍するようになり、日本社会は中国人ステレオタイプのイメージを邱永漢に投影する。その経緯から著者は「台湾人日本語亡命文学」の可能性をつぶした日本社会を告発する。その亡命文学概念から照射されるもう一人の作家は黄靈芝である。1946年10月末以降台湾でメディアから日本語が排除され、中華民国政府の統治下で中国語リテラシーが普及していく中でも日本語創作を継続した意図を、著者は短篇「紫陽花」から考察し、ポストコロニアルの視点を援用しながら、脱植民地化を主体的に実行できなかった黄靈芝の哀しみを見出そうとする。創作言語としての日本語と日本語読者市場が乖離している点に着目しながら、植民地政策による日本語普及から生まれた戦後の台湾日本語文学を、著者は言語の政治という視点で位置付けようとする。

第7章でも、同様に日本語で書く台湾ルーツの作家で、共に直木賞を受賞している東山彰良と陳舜臣を取り上げ、その創作戦略について論じている。ただ東山彰良の直木賞受賞作『流』(2015)には、中国という台湾問題を考える時に不可欠の別の要素が盛り込まれている。日影丈吉の推理小説を推理した第4章のように、ここでも著者は謎解きを骨子とするミステリー小説の更なる謎解きに挑戦する。祖父殺しの犯人を追及していく主人公が、やがて驚愕の真実を知るというミステリーの王道の背後に、実は中華民国と台湾をめぐる激動の歴史が浮かび上がる作品となっている構図を、著者は鮮やかに描いて見せる。台湾と日本をポストコロニアルの視点から考えるだけでなく、中国/台湾/日本という歴史及び地政学的な視点やポジショニングが、台湾文学を考える時に必要であることに著者は注意を促している。もう一人、東山彰良と同じく両親が台湾にルーツを持つが、台湾滞在経験があまりない作家の例として、陳舜臣が分析対象となる。神戸で生まれ育った陳舜臣は東山彰良の父親や祖父の世代にあたり、全集が27巻もあるほど多作で、多くの読者を擁する著名作家だが、当初ミステリー作家として出発したことは意外と注目されておらず、現在ではむしろ中国歴史小説の大家のイメージがある。だが、『道半ば』で書いているように、実は陳舜臣は二〇代前半を台湾で過ごし、二二八事件を現地で体験している。青春時代に李登輝とも親交のあった陳舜臣が、台湾を題材とした作品創作から離れて中国歴史小説へと移行していく経緯に、著者は逆に台湾をルーツに持つことの意味を見出そうとする。いわば回避されるがゆえに回避の対象たる台湾が色濃く存在するということなのだろう。

第8章では、その回避の理由の一つに日本社会の台湾への冷淡な眼差しを見る。取り上げられるのは丸谷才一の名著『裏声で歌へ君が代』(1972)である。発表当初から大評判となった小説だが、丸谷才一の台湾独立運動に関する資料的博学の背後に、實在のモデルが存在していたことを論じる評論はこれまで稀であった。作品中の台湾民主共和国準備政府第三代大統領が、現実世界の台湾共和国臨時政府初代大統領であった廖文毅であることは、台湾の現代史に通じている者ならある程度想像がつくが、著者はだからこそ、この小説が持つリアリティと先見性にもっと注目すべきであることを主張する。第6章で言及された邱永漢と親交を持った廖文毅が、何故に国民党政府と妥協したような帰台を遂げたのか、丸谷才一は邱永漢からどのような情報を受け取ったのか、著者の分析は鋭く、また今日の台湾問題を考える時の示唆に満ちている。21世紀に入ってから「太陽花学運」を始めとする台湾における民主主義実践を見れば、『裏声で歌へ君が代』の登場人物が「心のなかの国家の側に立つ」と決意するその言葉に、丸谷才一の理想主義を見出

す著者の見解は説得力を持つ。

第9章、第10章は時間の目盛りを更に進めて、現在の台湾文学が発する輝きの一つ、LGBTQ+文学を論じている。従来のアイデンティティ・ポリティックスではなく、セクシュアル・アイデンティティの視点から、第9章では「同志（LGBTQ+）文学」というカテゴリーの生成を中心的に担った紀大偉をクィア作家として取り上げ、大島渚の映画との関連についてインターテクスチュアリティ理論を援用して論じている。まず著者の大島渚の映画『儀式』（1971）に対する分析を詳細に提示し、更に台湾における受容を説明した上で、それが紀大偉の小説『儀式』（1993）でどのように結実するかを論じている。このテーマの唯一と言ってよい先行研究で白水紀子が指摘するように、紀大偉は大島渚『愛のコリーダ』から「セクシュアリティをめぐる多様な表現の可能性や文化実践の仕方を学んだ」のであり、更に大島渚の映画作品『儀式』、『戦場のメリークリスマス』（1983）、『絞死刑』（1968）がどのように紀大偉の『儀式』を始めとする小説に浸透したかを著者は分析対象とする。不在の父親の映像に支配された物語であること、あるいは男性間の絆を強化するためののみ女性が存在すること、この二点において紀大偉『儀式』は大島渚『儀式』を継承しているが、著者は紀大偉が更にレズビアンを造形している点にクィア作家としての独自の創造性を見出す。『戦場のメリークリスマス』における男性間の接吻と死からの解放、『絞死刑』における叙述者の介入による記憶の書き換え、こうした手法を紀大偉が大島渚から受容しているとの分析は、新鮮で先駆的である。

第10章では、同じようにインターテクスチュアリティの観点から、著者自身が日本語に翻訳している邱妙津『ある鰐の手記』（1994）と村上春樹『ノルウェーの森』（1987）という二つのテキスト間の関係を論じる。「鰐」がLGBTQ+の隠語として使われることもあるほど、中国語文化圏で大きな影響力を持つ小説だが、邱妙津自身の短い人生が更にそれに色濃く影を落としている。『ある鰐の手記』が村上春樹『ノルウェーの森』等への直接的言及や隠された参照が多い作品であることは、著者が分析する通りである。それを踏まえた上で、著者はレズビアン表象に関して、村上春樹が負のイメージを投射している傾向が見られる一方で、邱妙津は『ノルウェーの森』から村上春樹の予期しないレズビアン表象を読み取っていることを指摘する。更に村上春樹『スプートニクの恋人』（1999）との比較では、デレク・ジャーマンの『ザ・ガーデン』（1990）からの影響に言及しつつ、最終的に邱妙津『ある鰐の手記』と村上春樹『ノルウェーの森』が、テーマそのものを引用し、吸収し、変形させたテキスト同士の関係にあるとの結論を導き出している。まとめの部分で著者は、邱妙津が安部公房から手記というエクリチュールを受容したことを指摘している。今後の研究発展が望まれる興味深い分析成果である。

第11章では、それまでの日台双方の相手への眼差しの分析を応用する形で、見事にすれ違う日台の鏡像を論じている。取り上げられるのは吉田修一の小説『路』（2012）と魏徳聖の映画『海角七号』（2008）である。吉田修一の『路』は台湾高速鉄道建設を物語の場として、日本人と台湾人の若者世代の恋愛物語から、植民地経験を持つ老世代まで、人間模様を群像劇のように大きく展開させる。若い日本人にとって癒しの空間であるかのように台湾を描き、また植民地経験を共有する老世代が記憶を共有できるか否かをめぐって和解に至る経緯を述べる作品である。著者

はそれを台湾・ドリームに見立てて旧帝国の眼差しを批判する。一方、霧社事件をテーマとした『セデック・バレ』(2011)で名を成した魏徳聖の『海角七号』は、評者の政治的立場によって評価が分かれるが、台湾人男性と日本人女性の現在進行中の恋愛と、植民地時代の日本人男性と台湾人女性の悲恋がパラレルワールドのように映像化されている。過去においては女性が台湾人で男性が日本人、現在は女性が日本人で男性が台湾人という構図で、ジェンダーが空間政治化されている点を批判しながらも、著者はそこに日本の奪回、日本への勝利というジャパン・ドリームを見る。その意味では吉田修一の『路』と魏徳聖の『海角七号』は、見事にすれ違う鏡像のような関係にある。ただし、台湾がその包容力によって日本を庇護するという構図を、日本社会が自分にとって居心地のいい南国神話へと繋げることに警鐘を鳴らすことを著者は忘れない。

本書の最終を締めくくる第12章では、現代日本文学を代表する二人の作家の小説、津島佑子『あまりに野蛮な』(2008)と中上健次『異族』(1993)を取り上げて、その台湾表象を比較検討している。同時代を生き、互いを強く意識していた二人の作家だが、二人とも物語の生成場に強く執着する共通性を持っていた。中上健次の未完の長編小説『異族』は、在日朝鮮人、アイヌ民族、混血児、沖縄出身者、フィリピン人などが登場し、全き日本という虚構神話にすがりたい者たちへの痛烈な批判が込められた設定になっている。この小説には台湾表象として、比較的影が薄いながらも台湾原住民族の青年が登場するが、更に読み込むと台湾における中華民国をめぐる歴史物語が組み込まれていると著者は分析する。1984年に連載が始まったこの小説は1985年にいったん休筆となるが、台湾における戒厳令解除後の1988年に連載が再開されたことを念頭に置けば、ほぼ現実の台湾を描かないことが、逆に知るべき台湾を強く意識した結果であると著者は指摘する。この視点は著者の今後の研究発展へと繋がるだろう。結局、中上健次は病に倒れて亡くなり、台湾表象を含めてこの小説は未完のまま終わっているが、著者は津島佑子が『あまりに野蛮な』で、モナ・ルダオの幻影を引き継ぎながら、未完の『異族』を継承しているのではないかと問題提起する。霧社事件に触発されたこの小説は、1930年代の植民地時代と21世紀の現在を手紙と日記と旅で結んでいく。この小説を分析する上で、「家庭、性と植民地支配がいかに分割できない、重層に絡み合う複雑な構造になっているか」、「台湾植民地および先住民に働いた男性原理の国家暴力が、実際に女性を抑圧する男性原理と同じような構造を持つ共犯関係」であるとの呉佩珍の卓見を紹介した上で、そこから更に、津島佑子の女性原理に潜む、帝国・植民地の眼差しとの向き合い方の不十分性を剔抉するところに著者の独自性が表れている。

終章は第1章から第12章までのポリフォニックな台湾文学研究を、今後の展望へと繋げるものと言えよう。まず李琴峰や温又柔のように台湾にルーツを持つ作家の日本語文学が、ポリフォニカルな日本語使用によって、新たな地平を切り開いていく希望を述べている。同時に李琴峰の作品が台湾で発展する同志(LGBTQ+)文学とも響き合っていることを指摘するのも忘れない。また、日本の国語教科書に作品が収録されたことでも注目を浴びた呉明益のような、日本植民地統治時代の実体験はなくてもその歴史記憶を核に持つ作家の作品に、歴史的な時空を結ぶポリフォニーが聞こえることで、本当の意味でポストコロニアル作家が登場し始めていることを高く評価する。

今後の研究発展への期待

以上、本書の内容と意義についてまとめたが、ただし、各論に関して個別に見解を異にし、異論を唱える研究者もいるだろう。例えば第1章で論じられる日本語リテラシー問題に、台湾人の多様な主体性がどのように関連するか、階層やジェンダー差や時期や年齢などの視点を盛り込んだ周到な議論を経なければ、この問題が一元的に想像されてしまう危険がある。第3章で谷崎潤一郎『武州公秘話』と霧社事件との関連を指摘した部分では、時代背景から見て関連が想定できるのは指摘の通りだが、「野蛮への共鳴」の例示としてであっても、もう少し論の展開が必要だろう。第7章では陳舜臣が台湾を題材とした作品創作から離れて中国歴史小説へと移行していく経緯に、台湾をルーツに持つことの意味を見出そうとするが、これは諸事情に通じた著者の読みとして鋭いとしても、陳舜臣の創作意図の解明や一般読者の受容のあり方まで詳しく論じられていないのが惜しい。第9章と第10章ではインターテキストュアリティ理論を援用して論が展開するが、映画と文学という異なるジャンルのテキスト間の受容や変容について、物語というテキストの固定ではなく、その変容の機制を十分に解明する必要がある。テキストは作者であれ読者であれ、常に生成される現在形として現前する以上、固定されたテキスト間の物語受容に限定されないことにももう少し留意すべきだろう。第10章で扱うセクシュアリティに関して言えば、邱妙津の『ある鱈の手記』で「レズビアンとしての愛欲を実現し、レズビアンに「なる」ことへの恐怖から、拉子は恋人水伶の愛をも拒絶する」との分析は、あたかもレズビアンという定位がア priori に存在するかのようなのだが、セクシュアリティは揺れ動くものであり、そもそもヘテロセクシュアルかホモセクシュアルかでさえ不確定であればこそ、LGBTQ+概念が提起されているのではないだろうか。拉子の苦悩はむしろセクシュアリティを媒介に自分を発見し、人を愛するという行為自体から来るものであると分析することが十分可能であるように思う。

このように、各章について様々な討論点が提起されることは、著者も十分想定していると思うので、各章の論述を今後更に大きく発展させて、ポリフォニーがより大きな空間と音で奏でられることを期待したい。

////////////////////////////////////

岡野翔太（葉翔太） 著

『二重読みされる中華民国—戦後日本を生きる華僑・台僑たちの「故郷」—』

大阪大学出版会、2023 年、392 頁

交錯する台湾研究と華僑研究

——戦後日本における「台湾系華僑」像と中華民国の二重性

五十嵐 隆幸

1972 年 9 月 29 日、日本政府と中華民国政府との外交関係が断絶すると、日本の公的な場で「中華民国」は用いられなくなり、主要メディアでもその言葉の使用を手控えるような傾向が強まり、次第に「台湾」という訳が定着していった。だが、その訳は多くの矛盾をはらみ、ときに誤った認識をもたらしてきた。近年、日本のメディアでも従来に比べて「中華民国」という呼称を使うタブーは減少しているものの、いまだ誤解を招く見出しが紙面を飾っている。昨今、国際社会が台湾海峡で起こり得る紛争に関心を寄せるなか、1949 年末以来、台湾の地で三四半世紀に及んで存続してきた中華民国政府の存在を無視することができない時代が訪れている¹。

本書は、2022 年 3 月に大阪大学大学院人間科学研究科に提出された博士論文「語られない「台湾人」：戦後日本における華僑言説の成立と変遷」をもとに、加筆修正して出版された学術書である。本書は、2024 年 10 月に「日本華僑華人学会研究賞」を受賞しており、既に多くの学会誌や機関紙でも紹介され、優れた評価を得ている。既に本学会の会員の多くも、手に取っていることであろう。したがって、本稿では、ありきたりの章立てや各章の内容の紹介は省略し、本書の研究上の意義や社会的な貢献に焦点を絞って評していく。

日本台湾学会において「華僑」を研究する意義

本書のタイトルにも使われている「華僑」と聞くと、多くの人は中国（中国大陆）にルーツを持つ移民とその子孫という認識を持っているであろう。その学術的な定義は、中国に出自を持つ移民で、居住国の国籍を取得していない人のことを指す。

主に「台湾」を対象とした地域研究学会の学会誌で、台湾という地域に暮らす人々ではなく、日本に暮らす「華僑」を扱うことに対し、いささか違和感を覚える読者もいるだろう。そこには、前述した「中華民国」の存在を避けてきた風潮が重なるばかりか、近年では 1945 年以来事実上の独裁体制を敷いてきた国民党政権に対する移行期正義の考えや、中国の台湾に対する圧力が強まっている現状に鑑み、「中国と台湾は違う」といった単純化された理解が背景にあるのかもしれない。

だが、日本台湾学会の設立趣意書を読み返すと、「中国研究についていえば、台湾研究とも重

なり合う、複合的・重層的な中国、というイメージこそが、台湾研究と相互に建設的な関係を持ちうる中国研究ではないか」と謳われている。つまり、台湾研究から中国研究を照らしたり、相互に照らし合わせたりすることで、学際的な広がり期待している。さらに、設立趣意書では、「中国研究あるいは近代日本研究に対して、対抗的に台湾研究が組織されねばならないと主張しているのではない」と謳う。本書は、まさに日本、中国、そして台湾の間の複雑な関係と、そこに生じた問題の解明に挑んだチャレンジングな研究の成果であるばかりでなく、日本台湾学会設立の原点に立ち返った研究だと言えよう。

本書の問題提起：「台湾系華僑」とはどんな人か？

では、どうして中国にルーツを持つ「華僑」と「台湾」が結びつくのか。なぜ、著者はそこに問題関心を寄せたのか。評者が最初に指摘した「中華民国」の存在に目を配るだけでは、浮かび上がってこない。それは、本書の冒頭で著者が語るように、筆者自身のルーツによるところが大きい。

著者は、台湾出身の父を持つことから、「台湾系華僑」と呼ばれることがあったという。今日の日本社会では、日常的に「台湾人」と称することのほうが多いのではなかろうか。最近では日本のメディアでも、台湾で行われている「中国人か、台湾人か」を問う世論調査が取り上げられている。ときに「華僑」と呼ばれ、ときに「中国人」と指摘されることもあった著者がゆえに、「台湾系華僑」とはどのような人を指すのであろうかという疑問が浮かび、それが本書の出発点になっている。そして、なぜ「台湾系華僑」が在日華僑研究からこぼれ落ちてきたのか、既存の研究で見過ごされてきた問題に挑んだ研究である。

本書の問題背景にあるのは、1949年以降、中国共産党が指導する中華人民共和国政府と、中国国民党が指導する中華民国政府が、互いに「中国」の正統政府を主張し、相手の存在を否定してきたことにある。両政府は、ともに「国民」と見なしていた海外在住の華僑をめぐり、熾烈な争奪戦を繰り広げてきた。これを受け、日本在住の華僑のなかに、それぞれの政府を支持する組織が形作られたことが、本書で取り組む問題の根本的な要因となる。

本書によると、日本の華僑組織は、「大陸系（派）」と呼ばれる中華人民共和国を支持する組織と、「台湾系（派）」と呼ばれる中華民国を支持する組織に分かれている。ところが、日本の華僑組織の政治的帰属と、それぞれ参加する人々の出身地を統治する政府が必ずしも一致するとは限らないと著者は指摘する。「台湾系」の華僑組織に、中国大陆出身者（日本生まれを含む）が関わり、逆に「大陸系（親中華人民共和国派）」の華僑組織に台湾出身者（日本生まれを含む）が関わっているという。

また、この問題には、1945年まで台湾が日本統治下にあったことも複雑にからんでくる。日本統治下にあった台湾本島や澎湖諸島から当時の「日本内地」へと移住し、日本帝国崩壊後も引き続き日本で暮らす台湾出身者もいる。彼ら／彼女らは、戦後になって中華民国国籍に変わった。つまり、日本在住の中華民国国籍保有者には、中国大陆出身者もいれば、戦後になって国籍が変

わった台湾出身者もいるのである。この後者が、本書が焦点とする「台湾系華僑」の柱をなしている。

だが、従来の研究において、親中華人民共和国派であれ、親中華民国派であれ、日本在住華僑研究は、ほとんどが中国大陆出身者を対象としてきた。「台湾系華僑」については、在日華僑研究のなかで語りの内側に入れられるか、あるいは外側に排除されてきたと著者は指摘する。また、「華僑」の内側に入れられて語られたとしても、台湾独立派や親中華人民共和国派は注目されても、親中華民国派の存在は等閑視されてきたという。

本書の研究手法や分析など高く評価できる点は数多くあるが、最大の貢献は、複雑な在日華僑の問題にチャレンジし、これまでその研究からこぼれ落ち、議論の俎上に載せられることもなかった存在まで目を配り、それは学術研究の範囲にとどまることなく、在日華僑研究をより多様性を持った歴史として紡ぎ出したことにある。

模範的な歴史研究のアプローチ

学会は研究成果を発表する場だが、研究者を育成する役割も期待されている。日本台湾学会でも、多くの大学院生が会員として活躍しているが、日々研究に悩んでいることであろう。博士論文のみならず、修士論文に取り組んでいる大学院生には、ぜひ本書を手にとってもらいたい。本書のように、博士論文をもとに出版した学術書は、研究方法の粋がつまっている。特に本書は、華僑研究や台湾研究に限らず、歴史学で学位を取ろうと考えている大学院生にとっては必読書だと言っても過言でない。

まず、オーソドックスではあるが、本書は主に日本や中華民国の外交記録等の史料のほか、新聞や雑誌などを用いている。そのなかでも、日本政府の公文書が所蔵されている国立公文書館アジア歴史資料センター、中華民国政府の档案が所蔵されている国史館は、インターネット上での公開が進んでおり、手軽に用いることができることをこの場を借りて紹介させていただく²。外交史料のインターネット上の公開が進展したことを背景に、外交史研究は対象とする二国間、もしくは多国間の政府公文書を照らし合わせて分析することがほぼ必須となっている。中華民国はインターネット上での史料公開が進んでいるため、本書は大学院生が外交史研究の基礎を学んでいくのに適した教材として推薦したい。

次に、本書で用いられた史料のうち、特筆すべきものとして華僑組織などが発行する機関紙が挙げられる。主要全国紙のほか、地方紙はよく用いられるが、本書では実に30以上の機関紙を蒐集し、分析している。評者の学部時代、戦時下の上野動物園で象が殺処分された実話を元にした絵本『かわいそうなぞう』をテーマに選び、地域新聞を使って卒論を執筆した先輩がいた。日本や中華圏には、これまでの学術研究で用いられることがなかった文字資料も数多く眠っており、本書からは機関紙等を蒐集・分析する手法を学び取ることができる。また、華僑研究の分野では、世界各国の各華僑コミュニティが発行した新聞を用いて分析する手法が定着しており、本書は華僑研究の豊富な経験を日本の台湾研究に導入した代表的な研究書の一つになっている。

さらに本書では、個人や団体が所蔵する史料が用いられている。各団体には、一般には出回らない団体史や、会議記録などが保管されている。無論、著者のルーツがそれらへのアクセスを助けた面もあるが、華僑だからといって、何もせず黙っていてもそれらが手に入るわけではない。関係者へのインタビューも同様である。著者のフットワークの軽さとコミュニケーション能力無くして、本書は世に送り出されることはなかった。

そして、本書の学術研究上の最も秀でた点として、政府公文書を用いた政治レベルの交渉等の過程と、機関紙やインタビューなどから引き出した人間の営みを結び付けて議論を展開したことである。現実の問題として、得てして「血が通っていない政治」になりがちだが、残された政府公文書から人の感情を読み解くことは難しい。ゆえに、それだけを見て分析すると、現実とはかけ離れた表層的な政治が描かれてしまう。難しい政治問題を扱った研究書だが、そこに生きた人々の顔が浮かび上がってくるのも本書の魅力であり、模範的な歴史研究として高く評価できる。

今後の研究課題

当事者が研究することには、第三者的な視点が失われるデメリットが伴う。だが、本書は、客観性が保たれている。多くの関係者へのインタビューを重ねると、ややもするとウェットな感情に引きずられて客観性を失ってしまう恐れがある。そうならなかったのは、著者が中立性を意識したこともさることながら、著者が冒頭で「華僑」を「科学的」に分類したことも大きく影響している。

反対に当事者ゆえに、著者はこれまで見過ごされてきた問題を掘り起こすことができたのであろう。もしかすると、本書に至るまでの過程で「金の鮎脈」を探し当ててしまったのかもしれない。著者自身が語るように、本書は主に関東と関西をフィールドにしており、他の地域の事例を取り上げることで、本書の結論も少し変わってくるかもしれない。著者は、既に本書の補論として位置付けることができる愛知県の華僑組織を対象とした研究の成果を公開しているが³、さらに他の地域をフィールドにした研究の進展を期待する。また、世界に目を向ければ、本書は、日本に限らず他の地域の華僑研究でも「台湾系華僑」がこぼれ落ちている可能性があることを示唆している。これは到底一人で成し遂げ難い大業となるため、本書に触発された初学者が華僑研究や台湾研究を志すことも期待したい。

本書は、「評者が選ぶ2023年の一冊」であり、学ぶべきところが多く、批判することがあったとしても、それは「無いものねだり」になってしまう。そのため、最後に一つだけ要望を加え、締めくくらせていただきたい。著者が冒頭で「華僑」を「科学的」に分類したことについて、客観的な分析を支えた要因として提示したが、一言で「華僑」とまとめて語ることができないことを、学術界のみならず、一般に伝えていく工夫をしてもらいたい。従前から「簡潔に説明せよ」という風潮はあるが、近年ではTikTokで代表されるように短く手軽に伝えるコンテンツが目される傾向がある。実は複雑な「華僑」の多様性を一般に理解してもらうことは簡単ではない。中国からの留学生や移住者が増え続ける現状に鑑みても、本書を通じて得られた知見が人間社会に暮

らす多様な人々の相互理解に繋がり、幸せな社会の実現に貢献されていくことを切に願うばかりである。

注

- 1 川島真「どう呼んだらいいのか―支那・国府・中華民国／台湾―」『交流』Vol.1006、2025年1月、7-11頁。
- 2 五十嵐隆幸『大陸反攻と台湾―中華民国による統一の構想と挫折―』名古屋大学出版会、2021年、18頁。
- 3 岡野翔太（葉翔太）「戦後・冷戦期における愛知県の華僑と「二つの中国」」宮原暁、やまだあつし、小野純子、岡野（葉）翔太、呉穎濤編『名古屋、アジアに会おう―文化・歴史・記憶をあるく』図書出版みぎわ、2025年、55-79頁。

[illegible]

野口英佑著

『台湾における「日本」の過去と現在—糖業移民村を視座として』

ゆまに書房、2023 年、200 頁

神社再建をめぐる眼差しの交錯

五十嵐 真子

はじめに

本書は台東県鹿野郷龍田村において 2015 年に再建された日本統治時代の鹿野村社（再建後の名称は龍田神社）をめぐる行政機関と地域住民との交渉を分析し、現代台湾社会の日本認識やその位置づけを考察するものである。鹿野村社は 1921 年に建立され 1931 年に現在の位置に移設されたが、戦後は参拝するものもなく再建計画が始まるまでは台座を残すのみであった。この事例に限らず 1990 年代の終わりごろから、台湾では「閒置空間再利用」、要するに長年使用されず放置されていた建築物等を文化資産として利活用することが盛んに行われるようになってきた。そこには文化財の保存やその活用による芸術活動空間の確保、さらには人々の注目や往来を集めることによる防犯上の死角となるような空間をなくす意図などがあった（李・廖 2004）。これらの再利用空間には日本統治時代の建築物や遺構が多く含まれている¹。こうした流れの背景に「日本」に対してどのような認識あるのかについては、すでにいくつもの論集において議論がなされている²。これらの先行研究に対して、本書がどのような特徴を持つのかという点に注目していきながら、本書評を進めていきたい。

各章の概要と若干の考察

本書の構成は以下のである。

序章 現代台湾における「日本」を再考する

第 1 章 台湾東部の歴史的条件としての糖業移民史

第 2 章 地方政府と民間組織による日本統治時代の神社再建計画

第 3 章 中央政府による日本統治時代の神社再建計画

第 4 章 地元住民にとっての日本統治時代の神社—着工後の鹿野村社再建計画

第 5 章 「よそ者」にとっての日本統治時代の建築物

—鹿野区役場の修復と新移民コミュニティ

終章 「空白の場所」における日本統治時代の建築物の再利用が映し出すもの

補論 再建後の鹿野村社をめぐる政治過程

まず各章の概要を若干の考察を交えながら紹介したい。

序章では、「親日台湾」をめぐる日本のメディア・イメージやそれをめぐる先行研究のレビューをもとに、「親日」という言説だけでは捉えきれない鹿野村社再建過程を分析するという本書の目的が明記されている。本研究の特徴として、台湾社会での「日本」の位置づけやその意味を建築物再利用という事柄に関連づけて着目し、それに関わった多様な人々の立場や相互関係に焦点を合わせていること、またこれまでの研究で取り上げられてこなかった東部地域に注目していることを挙げている。

第1章は本書の議論の鍵となる龍田村（旧鹿野村）の3つの住民グループ、日本統治時代の知識人の子孫、二次移民、新移民が形成されていく過程について述べている。龍田村のある地域は、元々は先住民族が暮らしていた平原であったところに、1915年に台東製糖による日本人移民村が作られたことから移民の歴史が始まる。本書で焦点となっている鹿野村社はこの時代に建立されたものである。その後、漢人の移住もあり、それぞれに別の居住区域にて生活していたが、一部の漢人の知識層（行政機関や製糖会社に職を得た人々）が日本人居住区に住むようになった。

戦後の日本人の引き上げ後は他の漢人もかつての日本人居住区に移り住むようになり、さらに1958年からのパイナップル栽培事業振興によりその他の地域からの移住者も加わった。これらの人々が「二次移民」である。その後1970年代後半になると、都市から田園生活を求めていわゆるIターンで移住してくる人々、本書では「新移民」と呼ばれるグループが参入してきた。本書ではこれら3つの住民グループがどのように神社再建に関わったのかという点から分析が進められる。

ここで興味深いと思った点はこの地域の多様性が族群ではなく、移住してきた時期によることである。古くからの知識階層、農業移住者、都市からの新参者という違いは社会階層の違いでもあり、それが神社再建や地域振興への関わり方の違いを生み、本書の議論の特色となっている。

筆者がこうした社会構成を踏まえ「台湾の縮図」と呼ぶこの地域で、神社再建の動きは2000年代よりあったという。それらの成功に至らなかった計画が、第2章において詳しく言及されている。一つは郷公所が主導してもので、当時の陳水扁政権によって打ち出された「拡大公共建設方案」を活用して再建を計画したのだが、政府からの懸念—性急に行うことによる元の形が損なわれる恐れ—によって頓挫した。もう一つは民間の文化工作室が構想したものであるが、こちらも資金不足や住民の無関心により頓挫した。

評者はこの二つの事柄がページを割いて記述されていることは注目すべきだと考える。特に興味深いと感じたのが、失敗した理由が再建方法や資金不足といった現実的かつ具体的な理由であったことだ。「現代の台湾において日本を活用する」という事柄に関して、どうしても歴史認識をめぐる軋轢や政治的な意図といった側面に関心が傾きがちであるが、現実の事業においては具体的な計画や方法、費用等の問題も重要なのである。

これらの計画が頓挫した後の2011年に新たな計画が立ち上がり、神社再建が実現する契機については、続く第3章が詳細に説明している。今回は花東縦谷国家風景区管理処の当時の処長・陳崇賢という人物が主導し、実現へと動いた。陳処長はすでに台南にて八田與一記念公園事業を

成功させており、このときの手法として有効だった地元住民や政治家への根回しを展開し、またすでに八田與一公園にて実績のあった建築デザイナーと組むことで計画の着手に辿りつくことができたようだ。筆者は陳処長の動機について、彼の個人的な日本式宿舍やその景観へのノスタルジーがあったとしている。龍田村に今も残る「日本味道（日本の雰囲気）」を整備し、日本人観光客を呼び込もうというのが大きな目的であった。

ここで評者が注目するのは、神社の再建はあくまで龍田村の特色の発見と観光振興に主眼が置かれ、歴史的な観点についてあまり注意を払われていないことである。本章 82 ページ冒頭にある「そこに神社があったから再建されたまでだ」という住民（本書でいうところの二次移民）の言葉が象徴していると思われる。ここでは「日本」ということが大きな意味を持っているわけではなく、観光開発の資源として有用なものという認識であったことが伺われる。こうしていよいよ神社の再建計画が実施されるのだが、着工後に住民から抗議が上がる。その背景については第 4 章にて考察される。

住民からの抗議の内容は次の 2 点に集約できる。一つは残存している台座の扱い、もう一つは鳥居の位置である。本来の神社の形態にこだわったのは日本統治時代の知識人の子孫である。それについて筆者は、彼らにとって神社が「日本統治時代の知識人の子孫のルーツと権威の象徴である」（114 ページ）とし、さらに「台湾東部の日本人移民の信仰を保存すること」（114 ページ）が重要であったと考えられるとしている。しかし、最も積極的に抗議したのは新移民と呼ばれるグループであったという。彼らはメディアを巻き込み、あたかも住民の抗議によって再建が正しい方向へと導かれたという印象操作を行っている。彼らのこうした行動に対して、筆者は新参者である彼らがこの議論を機に地域社会への関与しようとする「一種のアイデンティティが視覚化されたもの」（132 ページ）と解釈している。

そしてもう一つの側面として、筆者は地方議会議員の「面子」についても言及している。ここでは鹿野郷民代表として長年地方政治の中心であった陳建光という人物について注目している。今回の計画は中央政府機関である国家風景区管理处から、いうなればトップダウンの形で始まったものである。陳氏は二次移民の代表ともいえる立場から調整役としての役割を発揮し、最終的に住民の声を反映した再建という形へと導いたように思われる。

このように中央政府からの働きかけによって始まった神社再建とは対照的に、ボトムアップによって成し遂げられた鹿野区役場修復について第 5 章では紹介されている。この事業の担い手の中心は新移民の李元和である。李氏はこの地域に生息する蝶類の保全活動を端緒に、やがて自然農法を実践する他の新移民たちと環境保全活動や地域おこしを展開するようになり、その活動拠点として日本統治時代から残る鹿野区役場の修復を計画するに至った。ここでもメディアを利用して半ば取り壊しが決まっていた役場を歴史的建造物として登録することを導き、寄付とボランティアによって修復を完成させている。

この修復活動について筆者は、「よそ者」である新移民にとっての「自己と生活する土地の結びつき」（164 ページ）である、と解釈する。その過程のなかで知識人の子孫たちの関心を引いているが、二次移民たちは無関心でこの計画には関与していないという。その理由として筆者に

よれば二次移民は崑慈堂という廟の管理組織を中心とした基盤を確保しており、そのために「無関心」なのだと推測している。そうだとすれば日本統治時代の建築物については、神社であれ区役場であれ、強い関心を引き起こすことはないのかもしれない。しかし知識人の子孫たちにとってみれば自らの権威を裏付ける日本統治時代の象徴で、また新移民にしてみればこの地域社会へ参与する足がかりとなる媒介となりうる。修復活動においてこの2者が親和するのは理解可能と言えよう。

終章においてここまでの議論を整理した後に、筆者はこの事例が台湾研究にもたらす意図について述べている。最初に提起されているのはこの事例にみられる「日本統治時代の建築物に対する認識の多様性と幅」(173 ページ)である。本書では中央政府の地方機関、地方政府、地方議員、民間団体、3つの住民グループという多数の視点が登場し、それぞれには「本音」と「建前」があり、状況に応じて使い分けるなどその複雑な状況が記述されている。

そして「日本統治時代の建築物の再利用でなくてはならなかったのか」(175 ページ)という点が提起されている。筆者はこの点に関して、この地域が糖業移民村であったことに注目し、戦後も糖業との関わりがあったことから、日本統治時代と現在との連続性が無視できなかったのではないかと、としている。

さらに、台湾東部の事例研究を台湾研究の縮図としてとらえる枠組みを提示している。台湾東部に見られる活発な人口移動が、「重層的な移民社会である台湾全体の縮図である」(176 ページ)とし、これまでのステレオタイプの台湾東部とは違った鹿野郷がその見方そのものを再考する契機となるのではないかと、としている。

本書ではこの後に、補論として再建後の動きについても言及している。鹿野郷公所による神社での高齢者向けサービスや桜の植樹、地元選出の民進党国会議員による隣接の公衆トイレ改修、無関心だった「二次移民」の活動への参加である。こうして再建後も多様な立場の人々が再建された神社に関わっていることがうかがえる。今後どのように展開していくのか、注目したいところである。

以上、若干の考察も交えながら本書の概要とそこで提起された課題について述べてきた。これを踏まえて本書の評価を述べて行きたい。

本書の評価

本書を一読後、最初に感じたのは、ここでは「鹿野村社の再建」という事柄が中心テーマであるが、これに関わった様々な機関、組織、グループ、さらにそれらを代表する人物が章を追うごとに次々と登場し、日本統治時代の建築物再建よりも、地域社会の人間関係の描写が主役なのではないか、ということである。本書の主人公は神社ではなく、この人間関係であり、当該地域社会の特性であるといえよう。トップダウンで始まった再建計画が動き出すと次々といろいろな立場の人々が登場し、それぞれの立場を代表しながら交渉し、妥協しながら完成していった過程は

大変興味深い。この「複雑さ」こそが本書の特色であり、行政文書の分析に加えて、当事者たちへの聞き取りを交えてそれを浮き彫りにしている点が評価できる。ただ、これらの人々やグループを概観できるようなページがあれば読者には親切であつたろうと思う。

先にも引用したが、筆者はこの状況から「日本統治時代の建築物に対する認識の多様性と幅」を読み取る。しかし、これは地域社会に対する立場の多様性と多層性と言い換えることができるのではないだろうか。3つの住民グループの人口比率がはっきりとは分らないが、おそらく二次移民の人々が比較的多数で影響力を持ち、そのため中央からの交渉の対象となつたと推測される。これが結果として「蚊帳の外」となつてしまった、旧知識人層（日本統治時代知識人の子孫）と新知識人層（都会からの新規移住者）によるいささか強引ともいえる介入を生じさせたようだ。

この軋轢は「日本」をめぐる認識の違いによるというより、地域内関係の溝が表出したようにみえる。今回は神社再建、特に台座の扱いがその議論の焦点となつているが、それ以外の事柄についても争点となる可能性はあるのではないだろうか。神社という歴史認識に関わるセンシティブな事柄であつたために日本に対する認識の違いという側面もあるが、今回は地域社会の資源をめぐる政治の場として利用されてしまったようである。また、新旧の知識人層が本来の形での再建にこだわつたのは、その他の多くの住民たちとの間にある歴史的な文化資産への意識の違いと評者は考える。

これは筆者の掲げているもう一つの問い、「日本統治時代の建築物の再利用でなくてはならなかったのか」についてもまた違った見方ができる。例えばそれが原住民や清代の遺構であつたらどうだったのだろうか。その場合も今回と同様な議論や駆け引きが行われたのではないだろうか。ただ、この地域の場合は日本統治期に移民村ができるまで「空白の場所」であつたために、歴史的な資産は日本統治に由来することは必然である。その点においては日本であることは重要だが、一方でたまたま日本であつたといえなくもない。「日本」であることは一面重要であるが、一方において重要ではないともいえる。

評者が本書でもう一つ注目するのは、第4章において再建に関わつた建築デザイナーの工夫について詳述されている点である。台座の再利用、建築材、鳥居や石灯籠の位置について住民説明会にて理解を得た上で工程が進められた。隣接する廟との関係や周囲の景観への影響、材料価格への対応など、実際のところ、ここでも様々な議論や妥協の中で再建が進んだことが理解でき、大変に興味深い点であつた。これも本書において評価できるポイントである。ただ、再建にあたつて元々あつたはずの手水鉢ではなく、なかつたはずの石灯籠にこだわつたのかについて、建築デザイナーの「日本」、もしくは「神社」への認識が現れているのではないだろうか。この部分についての分析が必要ではないかと考える。

総評として、本書は再建に至る様々なプロセスを丁寧に記述していることが評価できる。しかし、序章にて述べられている「日本」の位置づけやその意味については少し議論が足りていないと思われる。ここでは各住民グループが自らのアイデンティティを表明するための道具でしかない、という印象である。評者には認識の多様性というより、地域社会内での立場の違いのようにみえる。再建された神社での祭祀活動が先送りされた、と134ページには記述されているが、こ

れについてどんな議論がなされたのか非常に気にかかるところである。また、109 ページにはあくまで「観光のため」で「日本軍国主義の賞賛にあたるものではない」と批判に対して恐れはなかったが、実際には政策的な調整があった、とある。この部分についても詳細が分かれば、「日本」の位置づけや認識についての議論が深まったのではないかと評者は考えている。

おわりに

再建された鹿野村社を地図上にて確認してみると、その周辺に複数の宿泊施設があることがわかる。路線バスに加えて1日に2便ではあるが、観光地をめぐる路線バス「台湾好行」のバス停「龍田神社」も設置されている。近隣の鹿野高台は熱気球やパラグライダーといったスカイスポーツのスポットで、また茶業を紹介する施設や観光農場などもあり、一帯の観光開発は確かに進んでいるようだ。また、Google Map にて閲覧するとサイクリングをしながらここを訪れた日本人観光客の書き込みも複数あり、日本人観光客を誘致するという当初の目的はある程度達成されているといえるだろう。

こうした全体を見てみると神社はこの地域の観光スポットの一つに過ぎないという印象だ。鹿野郷という地域社会のもつ文化観光資源の構成要素として考えてみると、現在のこの地域での「日本」の意味が少し見えてくるような気がするのである。

注

- 1 そのなかには必ずしも「日本」を想起させるものばかりではないことを指摘しておきたい。例えばその代表的な施設として著名な「台北之家」は日本統治期の建築であるが、アメリカ大使館として使用されていたものである。また、かつての酒造工場であった現在の「華山 1914 文化创意産業園區」などは近代産業遺産の利活用と呼ぶ方が適切であろう。
- 2 例えば、所澤潤・林初梅編 (2016)、三尾裕子・遠藤央・植野弘子編 (2016)、植野弘子・上水流久彦編 (2020a) (2020b) など。

参考文献

- 植野弘子・上水流久彦編 (2020a) 『帝国日本における越境・断絶・残像—モノの移動』風響社。
植野弘子・上水流久彦編 (2020b) 『帝国日本における越境・断絶・残像—人の移動』風響社。
所澤潤・林初梅編 (2016) 『台湾のなかの日本記憶—戦後の「再会」による新たなイメージの構築』三元社。
三尾裕子・遠藤央・植野弘子編 (2016) 『帝国日本の記憶—台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』慶應義塾大学出版会。
李宜君・廖俊彦 (2004) 『台湾の再生空間』遠足文化。

////////////////////////////////////

陳玉箴著

『「台湾菜」の文化史——国民料理の創造と変遷』

天神裕子訳、三元社、2024 年、488 頁

飲食文化史に見る「台湾」言説の変容

黒羽 夏彦

はじめに

具体的な料理名を挙げて「これは台湾料理か？」と問われたとき、筆者自身はいつも居心地の悪さを感じてしまう。海外の料理を説明するにあたって国家／民族名を冠した表現を便宜的に用いるのはやむを得ないが、そこには同時に、エスニシティにまつわる本質主義的な断定のニュアンスを帯びてしまうのが自覚させられる。「台湾料理」か否かという問いが発せられたその瞬間に、食べ物の具体的な記述という次元を超えて、話者自身がそれを「我々」（＝台湾）に帰属させるか排除するかという意識のあり方が、名づけという断定的な契機を通して露呈されてくる。ナショナル・アイデンティティをめぐる議論が絶えない台湾にあっては、その印象がより強くなる。

こうしたもどかしさを感じていた筆者にとって、陳玉箴『「台湾菜」の文化史——国民料理の創造と変遷』（以降、本書と表記）の結論部分で示されるサラダジャーの比喩は示唆的であった。

「台湾菜」とは、例えるならラベルが貼られた空の瓶なのだ。異なる歴史的時期に、異なる台湾の住民がその瓶のなかに異なる中身を入れ、外側のラベルには定義者がその都度異なる名称を書きつけた。瓶の中身は住民たちが入れたものが増えたり混ざり合ったりして変化を起こした¹。

食文化の混交や変化が繰り返されてきたのと同時に、それをカテゴライズし、名付ける視座そのものもまた変化を続けてきた。本書で焦点化されるのは、現実の生活世界における飲食実践が記述され、かつ社会的コンテキストに位置づけなおされる際の視座そのものが、時代や政治環境の変遷に応じて移り変わってきたという側面である。そして、「台湾料理／台湾菜」をめぐる言説の変遷をたどりながら、この社会に暮らす人々にとっての「国民料理」（national cuisine／国族菜）の内容もまた書き変えられてきた経緯が浮き彫りにされる。本書は「台湾料理／台湾菜」とは何か？という定義をめぐる問いに直接的に答えるわけではない。むしろ「台湾料理／台湾菜」言説の歴史的変遷過程をたどる作業を通して変容の動態そのものを提示したところに本書の長所があり、それはまさに現在進行形の動きでもある。

本書日本語版のタイトルは、中国語原書（『「台湾菜」的文化史』²）を踏襲して『「台湾菜」の文化史』

とされ、中国語の発音が「タイワンツァイ」とカタカナで付されている。日本語書籍としての通用性を考えれば『台湾料理の文化史』とする方が自然かもしれない。ただし、本書では日本統治期における日本語表現としての「台湾料理」と、戦後における中国語表現としての「台湾菜」との対比が重要な論点となり、訳語の混乱を避けるため原書の表記がそのまま採用されたのであろう（日本語版の書名に敢えて中国語の「台湾菜」を用いた理由について、訳者あとがき等で説明しておく方が日本語読者にとっては親切だと思われる）。また、タイトルで「台湾菜」とカギ括弧が用いられているのは、料理の具体的な内容よりも、むしろ「台湾料理／台湾菜」という言葉をめぐる一連の言説そのものの分析に本書の重点が置かれているからである。

もちろん、本書でも言説分析の前提として様々な「台湾菜」が紹介されるが、料理の具体的な内容の方に関心がある場合は、著者の『大碗大匙呷飽未？ 一定要知道的台湾菜故事！』がイラスト入りの読み物なので分かりやすい（ただし、日本語訳はない）³。また、本書の分析対象は日本統治期以降に限定されるが、先住民の時代から現代に至るまでの台湾における飲食文化の歴史に関しては、やはり著者の『飲食文化』第5章「台湾当代飲食文化的形成」が簡にして要を得た説明をしている⁴。

台湾の飲食文化を紹介する日本語文献は観光ガイドブックやレシピ本も含め多数あるが、それらの詳細はSNET台湾編『臺灣書旅 台湾の食文化を知るためのブックガイド』を参照されたい⁵。本書と同様に「国民料理」の観点から検討した論考としては、本書日本語版に解説を寄せている岩間一弘の『中国料理の世界史——美食のナショナリズムをこえて』第一部第五章「台湾料理の脱植民地化と本土化——昭和天皇・圓山大飯店・鼎泰豊」が挙げられる⁶。また、台湾の飲食文化を理解する上で辛永清『安閑園の食卓——私の台南物語』や焦桐『味の台湾』なども重要な著作だが、本書の観点に立つならば、これらは台湾の飲食文化をめぐる言説の形成という脈絡でむしろ分析対象となるべき性格を持つテキストと位置付けられる⁷。

本書の著者について

本書の射程を理解するための準備として、著者の略歴と研究業績を概観したい⁸。著者は国立台湾大学政治学系国際関係組を卒業、国立政治大学新聞研究所（修士課程）を修了した後、三年ほどメディアで仕事をしていた。その間、メディア研究の教科書的な著作を翻訳したほか⁹、中欧旅行の体験をもとにした観光案内も執筆している¹⁰。その後、オランダのライデン大学に留学し、2010年に*Embodying Nation in Food Consumption: Changing Boundaries of “Taiwanese Cuisine” (1895-2008)*で博士号を取得した。これが本書の原型にあたる。台湾へ帰国後、国立高雄餐旅大学台湾飲食文化産業研究所や国立台湾師範大学台湾語文学系に勤務するかたわら、前述した一般向けの啓蒙書『大碗大匙呷飽未？ 一定要知道的台湾菜故事！』や教科書『飲食文化』を刊行した。また、チフェルトカ『飲食、権力及びナショナル・アイデンティティ——現代日本料理の形成』を中国語訳したほか¹¹、東京でのフィールドワークに基づいて日本における「台湾料理」受容に関する研究も発表しており¹²、日本事情にも造詣が深い。以上の略歴から、第1にメディア分析

の研究手法、第2に豊富な海外経験による国際比較の視野が本書の背後にあることを指摘しておきたい。

著者の研究業績に関しては、叙述上の便宜を考えて暫定的に次のように分類を試みた¹³。

- ①緻密な史料調査に基づき、飲食史を政治的・社会的脈絡の中で分析¹⁴
- ②個人的テキストの分析により、飲食実践と記憶との関連を考察¹⁵
- ③オーラルヒストリーや現地調査をまじえ、飲食実践の具体相を考察¹⁶
- ④飲食実践との関連から派生した生活史研究¹⁷

もちろん実際には厳密に区別されるわけではなく、以上の分析視角を組み合わせると論文は執筆されているが、ここから次のことが指摘できる。記録された過去の史料（新聞記事、レシピ、統計資料など）をもとに飲食史の政治的・社会的脈絡を提示すると同時に（①）、個人的記憶（②・③）もそこに照合させて両方の視点を往還させながら、大きな叙述の枠組みへとつなげられている。そして、飲食はそれ自体として完結するわけではなく、他の生活史の領域とも連動している（④）。こうした視点の複層性は本書にも通底している。

本書の内容

「第1章 序論『台湾菜』の文化史」では、「台湾菜」の多元的意味を探るという問題意識から説き起こされる。「国民料理」が形成される背景には、政治的要素、文化的要素、構成メンバー（個人）の主観的アイデンティティという三者の相互作用がある。日本の植民地支配、戦後の権威主義体制、1990年代以降の民主化・本土化という形で台湾の政治構造が変動する中で、「台湾菜」の意味は上述した三者の相互作用を通して如何に変遷してきたのか？「台湾菜」の変容過程で消費者はそれを如何に理解し、また如何なる役割を果たしたのか？という疑問に本書の課題が設定される。そして、マクロな歴史的脈絡とミクロなレベルにおける個人の認識との関係性を明らかにするため、①料理の具体的内容、②その料理に付された記号の形成、③飲食の身体感覚を通した認知、以上三者の関連の考察という方法的枠組が提示される。

本書の方法論では「公共パフォーマンス」（public performance）と「生活実践」（lived practice）との区別が重要となる。前者は上流階級や知識人、レストラン経営者、レシピの作者などが料理に文化的象徴性を付与する側面を指す。対して、後者は一般庶民の習慣的・日常的な飲食行為であり、当事者はその文化的意義を意識化することではなく、従って「〇〇料理」として記述されることはなかった。つまり、名付けるに値する／しないという象徴化行為が論点となる。日本統治期の飲食文化を分析するにあたり、「第2章 植民地の高級料理——日本統治期の『台湾料理』の誕生」は前者、「第3章 古来の台湾の味——庶民の食卓」は後者を論じており、両者の差異は戦後の「台湾菜」認識にも影響する。

「台湾料理」という独立したカテゴリーは、日本の統治者が植民地台湾の特色ある料理を宴席に取り込んだ際に現れた。それは「台湾人が食べる料理」を指すのではなく、あくまでも植民地風味の表現であり、その意味で「台湾料理」は「他称」から始まった。日本人は「日本料理」及

び「西洋料理」と区別するため、植民地料理を「台湾料理」と呼んだが、それは漢族系の料理であったため「支那料理」という呼称も混在していた¹⁸。また、1920年代に入ると、台湾人エリート階層が集った江山楼や蓬莱閣などの酒楼も、福建料理だけでなく中国各地の料理を取り込んでおり、当初から混交性を有していた。ところが、台湾人エリートはこれを「支那料理」と区別するようになり、「他称」として始まった「台湾料理」は「自称」のものへと変化する。他方で、当時のエリート階層の「台湾料理」言説ではほとんど言及されることのなかった庶民料理に関しては第三章で論じられる。例えば、家庭料理の食材や調理方法、節句や慶事の宴席（とりわけ辦桌）、点心や街角の軽食などが紹介され、これらは近年における「台湾菜」認識のベースを成している。ただし、前述した蓬莱閣系統の料理人の技術や知識も戦後に続いており、「台湾菜」認識の二重性が見て取れる。

日本統治期に常用された「台湾料理」という言葉は、戦後になると「台湾菜」もしくは「台菜」に取って代わられた。これは言語的転換というにとどまらず、かつての繊細な酒楼料理という高級感が消え、正式な場面には出せない単純な料理へとイメージが変化した。その背景要因は「第4章 移植と混交——戦後書き換えられた飲食地図」で論じられる。第1に、国民党政権が実施した「公共食堂」、「特種酒家」などの政策的展開によって台湾の飲食業界が再編成された過程が分析される。第2に、外省人移民の到来によって中国各地の料理が台湾で広まり、融合し始めた経緯が検討される（例えば、眷村を通して小麦粉料理が庶民生活に普及した事例）。第3に、台湾は「中華文化」の基地と位置付けられたが、「台菜」は中華料理系統（四大／八大）のヒエラルキーで周縁化されたことが指摘される。「台菜」レストランには①日本統治期の高級酒楼料理、②家庭料理に由来する「粥と小皿料理」という二つのタイプがあったが、一般庶民には後者の方が馴染みがあったため、前者は1980年代以降に消えた。

「第5章 エスニシティ、階級と飲食『伝統』の創造」では民主化・本土化以降の動向との関連で議論が進められる。第1に、「四大族群」言説¹⁹との関連で先住民と客家が取り上げられる。台湾の主体性を示す必要から先住民の存在がクローズアップされ、また観光業の発展に伴い先住民料理には「原始、自然、健康」というイメージが付与された。客家料理も「勤勉、忍耐強い」というステレオタイプに合致する形で特徴づけられた。第2に、「国宴」（政府主催の宴席）メニューの変化が分析され、「台湾化」と「族群融合」という意味付けが指摘される。「国宴」メニューには「小吃」（軽食）も取り込まれており、「台湾菜」言説の庶民化傾向がうかがえる。

「第6章 台湾菜と『故郷の味』——家および文化的記憶の変遷」では唐孫魯（作家）、遼耀東（歴史学者）、林海音（作家）という三人の飲食エクリチュールが考察される。飲食にまつわる記憶とは本来的に身体的・個人的なものだが、それを他人と分かち合おうとする側面（コミュニケーション的記憶）と集団共同の記憶（文化的記憶）との関連が論じられる。

「第7章 結論 ガラスの容器のなかの台湾菜」では、①特定の料理への象徴的意味の付与、②象徴的意味を付与された料理が商品化、③その象徴的意味を消費者が認知しながら飲食行為を行う——以上の循環を通して消費者が特定の料理にアイデンティファイし、「国民料理」が形成される構図が提示される。

本書へのコメント

本書の中国語原書の刊行後、次の書評が出ている。潘宗億は方法論の部分で本書の啓発性を認める²⁰。洪鏐雅は、本書では国家の契機が重視されていると捉え、それに対して地方社会の商業活動の視点から本書への議論を試みている²¹。横田浩一は国民料理の形成過程の分析において市場や消費者の影響も考慮に入れた点を特徴として挙げる。また、近年における「新移民」料理の位置づけや中国の客家料理と台湾の客家料理との関係などの論点も提起している²²。

筆者のコメントは以下の通りである。本書の読みどころは、料理という生活史の非政治的題材を通して、「台湾」言説の変化という政治社会的変動を浮き彫りにした点にある。飲食という生活行為はそのままでは意識化されない。誰かが記述し、命名することで「〇〇料理」に組み込まれる。では、誰がその解釈を決めるのか？ 定義者が変われば、また新たな意味が付与されるという動態が本書では示されている。文化的意義を生成する言説はマスメディア（新聞、テレビ番組、レシピ本、グルメ雑誌、作家や料理人の回想録など）を通して流布されていく点を考えると、本書はメディア分析としての性質も持つ（例えば、傅培梅の料理番組の事例）。

ところで、本書では「台湾菜」と「国民料理」という二つのキーワードの関係性が不明瞭である。「台湾料理／台湾菜」という現実社会で用いられてきた言葉の含意の変遷が本書の分析の柱であるが、結論ではこの「台湾菜」が理論的概念としての「国民料理」に置き換えられて議論が進められる。「台湾菜」を台湾地域の「国民料理」として理解することも可能ではある。ただし、現実社会では台湾語＝閩南語というエスニシティの狭義の含意から、「台湾菜」は閩南系の人々の料理という語感も帯びてしまい、先住民料理や客家料理との関係の記述に困難を来す。例えば、著者の『大碗大匙呷飽未？ 一定要知道的台湾菜故事！』で紹介されているのは狭義の「台湾菜」である。「台湾菜」という言葉を「国民料理」の議論に接続するにはさらに補足説明が必要となろう。

好意的に解するならば、サラダジャーの比喻がカギとなる。飲食文化言説を共有する人々のまとまりが空のガラス瓶で示される。その中身も、そこに貼られるレッテルも時代に応じて変化してきた。このガラス瓶＝命名以前のまとまり自体を可視化し得たところに本書の視点の成功がある。この視点は飲食文化史にとどまらず、広く台湾アイデンティティをめぐる議論を進めるにあたって参照できる。

誰が「台湾料理／台湾菜」の定義を下すのかという言説的な権力関係が本書の論点の一つであり、かつては日本の植民地統治者もそこに関わっていた。近年における観光業の進展を考慮すると、日本人観光客という外部のまなざしが「台湾料理／台湾菜」言説にどのような影響をもたらしているのか、これも日台双方の研究者が議論を交わせる論点である。前述したように著者も東京の台湾料理店の調査を行っている。

そもそも「日本料理」といっても決して自明なものではない²³。本書で用いられた研究手法は「日本料理」研究でも応用可能であり、その意味で本書は飲食文化史の国際比較研究に向けた基礎としても活用することができる。

注

- 1 陳玉箴 [天神裕子訳]『『台湾菜』の文化史——国民料理の創造と変遷』三元社、2024 年、412 頁。
- 2 陳玉箴『『台湾菜』の文化史：食物消費中的国家体現』台北：聯經出版、2020 年。
- 3 陳玉箴『大碗大匙呷飽未？一定要知道的台湾菜故事！』台北：聯合文学出版、2014 年。
- 4 陳玉箴『飲食文化』台北：華都文化、2015 年。ただし、2023 年刊行の同書第 2 版では第 4 章となっている。
- 5 特定非営利活動法人日本台湾教育支援研究者ネットワーク (SNET 台湾) 編『臺灣書旅 台湾の食文化を知るためのブックガイド』台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター、2024 年。
- 6 岩間一弘『中国料理の世界史——美食のナショナリズムをこえて』慶應義塾大学出版会、2021 年。
- 7 辛永清『安閑園の食卓——私の台南物語』文藝春秋、1986 年／集英社文庫、2010 年；焦桐 [川浩二訳]『味の台湾』みすず書房、2021 年。なお、前者に関しては陳玉箴「重返安閑園：辛永清「食譜文学」中的時空、家国与性別」(『台湾文学研究學報』第 32 期、2021 年 4 月、265-303 頁) で分析されている。
- 8 著者の略歴に関してはこれまでに刊行された著訳書の著訳者紹介や序文などを参照して整理した。
- 9 Roger Silverstone [陳玉箴訳]『媒介概念十六講』台北：韋伯文化、2003 年；Klaus Bruhn Jensen 等 [陳玉箴訳]『媒介与伝播研究法指南：質性与量化方法論』台北：韋伯文化、2004 年。
- 10 陳玉箴『聽布拉格唱情歌：飛揚在奧地利・匈牙利・捷克的音符』台北：葉子出版、2004 年。
- 11 Cwientka, Katarzyna J., *Modern Japanese Cuisine : Food, Power and National Identity*, London : Reaktion, 2006 ; 克威卡 [陳玉箴訳]『飲食、權力与国族認同：当代日本料理の形成』台北：韋伯文化国際、2009 年。
- 12 陳玉箴「『道地』の建構：「台湾料理」在東京の生産、再現与変遷」『台湾人類學刊』第 14 卷第 1 期、2016 年 6 月、7-53 頁。
- 13 他に Tseng, P. and Chen, Y., Making “Chinese Cuisine”: The Grand Hotel and Chuan-Yang Cuisine in Postwar Taiwan (*Global Food History*, vol.6, no.22, 2020, pp.110-127) もあるが、筆者は入手できず、内容を確認していない。
- 14 本書に組み込まれている場合は該当する章節を括弧内に示す。「食物消費中的国家、階級与文化展演：日治与戦後初期的“台湾菜”」『台湾史研究』第 15 卷第 3 期、2008 年 9 月、139-186 頁 (第 2・3 章)；Ethnic Politics in the Framing of National Cuisine, *Food, Culture and Society*, vol.14, no.3, 2011, pp. 315-333 (第 5 章)；「政權轉移下的消費空間轉型：戦後初期的公共食堂与酒家 (1945-1962)」『台湾師大歷史學報』第 39 期、2013 年、183-229 頁 (第 4 章第 1・2 節)；「日本化的西洋味：日治時期台灣的西洋料理及台人的消費實踐」『台湾史研究』第 20 卷第 1 期、2013 年 3 月、79-125 頁；「營養論述与殖民統治：日治時期台灣的乳品生産与消費」『台湾師大歷史學報』第 54 期、2015 年、95-147 頁；「依附与競争：戦後初期美援下的台湾乳業 (1945-1965)」『中国飲食文化』第 13 卷第 1 期、2017 年、35-73 頁；「環境、軍需、移動人口：澎湖餐飲業歴史変遷与「島嶼型食生活」研究」『台湾史研究』第 25 卷第 3 期、2018 年 9 月、1-42 頁；「漢餅、台湾菓子、麵包：日治時期台湾烘焙産業之形成与消費変遷」『台湾史研究』第 28 卷第 1 期、2021 年 3 月、43-85 頁；The Taste of Colonialism? Changing Norms of Rice Production and Consumption in Modern Taiwan, in Ronald Ranta, Alejandro Colas, Daniel Monterescu eds., *Going Native?: Settler Colonialism and Food*, London : Palgrave Macmillan, 2022, pp.65-84.
- 15 Bodily Memory and Sensibility: Culinary Preferences and National Consciousness in the Case of “Taiwanese Cuisine”, *Taiwan Journal of Anthropology*, vol.8, no.3, 2010, pp.163-196 ; 「從溝通記憶到文化記憶：1960-1980 年代台湾飲食文学中的北平懷郷書寫」『台湾文学學報』第 25 期、2014 年 12 月、33-68 頁 (第 6 章)；「『家』の身体实践：林海音飲食書寫中的烹与食」『成大中文学報』第 53 期、2016 年、155-187 頁 (第 6 章)；「重返安閑園：辛永清「食譜文学」中的時空、家国与性別」『台湾文学研究學報』第 32 期、2021 年 4 月、265-303 頁。
- 16 (著者を研究主幹とする共同調査報告)『台江地区文史資源調査及応用規画研究 (四)：台江飲食文化源流 成果報告書』、台江国家公園管理处、2015 年 12 月；「『道地』の建構：「台湾料理」在東京の生産、再現与変遷」『台湾人類學刊』第 14 卷第 1 期、2016 年 6 月、7-53 頁；(曾品滄と共著)「台江地域食生活的伝統、変遷及其創新運用」『国家公園學報』第 26 卷第 2 期、2016 年 12 月、61-76 頁；「伝播領域的飲食文化研究：「煮吃師傅」口述史与社会記憶」『伝播研究与实践』第 7 卷第 1 期、2017 年 1 月、265-290 頁。
- 17 「從「家務」到「労働商品」：台湾家庭晚餐型態變遷的考察 (1980-2013)」『台湾學誌』第 13 期、2016 年 4 月、71-103 頁；Family Livelihood, Social Class and Mothers' Self-cognition : The Transformation of “Mothering” in Japanese Colonial Taiwan (1895–1945), *Journal of Family History*, vol.46, no.2, 2021, pp.154-167.
- 18 チフェエルトカは近代日本料理の変遷を検討する中で「日本—西洋—中華」料理の三角構造を指摘したが(『飲食、權力与国族認同」、164-176 頁)、本書で示された「日本—西洋—台湾」料理の構図もこれに対応している。
- 19 「四大族群」言説の成立過程については、王甫昌 [松葉隼・洪郁如訳]『族群——現代台湾のエスニック・イマジネーション』(東方書店、2014 年)を参照。

- 20 潘宗億「書評：『「台湾菜」的文化史：食物消費中的国家體現』」『中国飲食文化』第20卷第2期、2024年10月、183-193頁。
- 21 洪綉雅「評陳玉箴『「台湾菜」的文化史：食物消費中的国家體現』」『台湾史研究』第29卷第1期、2022年3月、249-259頁。
- 22 横田浩一「書評：『「台湾菜」的文化史：食物消費中的国家體現』」『華僑華人研究』第18号、2021年、160-163頁。
- 23 原田信男『和食と日本文化——日本料理の社会史』小学館、2005年、9頁。

////////////////////////////////////

顧恒湛著

『再殖民、地縁政治与抵抗：戦後台湾原住民族的形塑（1945-1984）』

南天書局、2022 年、xxi + 436 頁

台湾現代史における先住民族の形成過程

宮岡 真央子

はじめに

本書は、台湾でオーストロネシア語族系先住諸民族が、「原住民族」(indigenous peoples、以下、日本語で「先住民族」)へと形成された過程について、第二次世界大戦後(以下、「戦後」)の台湾の歴史的展開から検討した研究書である。著者の博士論文¹をもととし、曹永和文教基金会の出版助成により刊行された。著者は大学院修了後、中央研究院台湾史研究所ポストドクター研究員や大学兼任講師などを歴任し、2023 年 2 月に同研究所助研究員に就いて今日に至る。

評者が本書を初めて手にしてから、すでに 2 年以上が経過してしまった。その間、折に触れて本書を開き、多くの点を学んできた。遅ればせながらそれらを書評としてここに書き留めておくことにしたい。以下、本書の構成、各章の内容を概観した上で、本書の意義、残された課題について述べる。

なお、本稿では、台湾の「原住民／原住民族」に相当する日本語として「先住民／先住民族」という語を用いて表記する。前者「先住民」は諸個人や先住民一般を示す場合に、後者「先住民族」は民族集団やそれらの集合体、また集団的権利の主体を含意する場合に用いる。本書で議論される反／脱植民地主義的な先住民族運動によって抵抗し、汎先住民族意識を有するような存在として形成された「先住民族 indigenous peoples」であることを特に強調するときは、括弧付きで表記する。ただし、これは著者の原文での用法に忠実に従っているわけではなく、あくまでも本稿の読みやすさに鑑みた評者による書き分けである。また、組織の名称に「原住民」という語が含まれる場合には、原語のまま表記する。

1. 本書の構成

本書の章立てを以下にまず掲げておく(日本語訳は評者による、以下同様)。

緒論

第一章 政権の移転：山地管理における変化と持続

第二章 国共戦争、国家建設および先住民の政治

第三章 冷戦構造下の山地開発と殖民

第四章 「山地人」による表現の試みと頓挫

第五章 台湾の再形成と反植民地主義先住民族運動の誕生

結論

評者による理解では、これらは、おおまかには政治経済史に比重が置かれた前半（第一章から第三章）と社会史に比重が置かれた後半（第四章と第五章）とに大別してとらえることができる。前半では、東アジアとグローバルな地政学を背景として成立した戦後台湾の権威主義的党国体制が、いかに先住民族を軍事的・政治的に動員し、どのような経済政策を行い、それにより先住民族の政治、経済、生活はどのような変容を迫られたのかという問題について、その前史である日本統治期から1960年代までを射程に論じる。書名の「再殖民、地縁政治」におおむね相当する部分である。それに対して後半では、1960年代後半からさまざまな問題が噴出するようになった先住民族の社会状況、それをめぐる先住民自身と台湾社会における関心の高まりの過程がたどられ、1980年代前半に先住民族運動に至った経緯が詳述される。書名の「抵抗」については第二章でも取り上げられるが、これが後半部における主軸をなすことは間違いない。

2. 各章の内容

緒論では、著者の問題意識と本書の目的や方法が述べられ、先行研究が検討される。冒頭で、2016年8月1日の蔡英文総統による先住民族に対する謝罪を引用し、台湾で用いられる「原住民族」、日本語でいう「先住民族」には、それが台湾の元々の主人であるという「汎先住民族意識」と、歴代の殖民政権に迫害されてきた民族であるという脱／反植民地主義的な意味が込められていることをまず確認する（1-3頁）。このような「先住民族」概念が形成されたのは、1983年の台湾大学の学生による『高山青』創刊と翌年の「台湾原住民権利促進会」発足によるものと従来説明されてきた。これについて著者は、時間的・歴史的深度が十分ではないと批判する（4頁）。そして、「先住民族」の形成過程が反／脱植民地主義の抵抗運動に連動して起こったのであれば、国家による先住民族の植民地化の過程をより広い時空間のなかでとらえ直す必要があると説く（5-6頁）。そこで著者は本稿冒頭で参照した目的のもと、(1) 党国体制と冷戦によって構成される戦後台湾の国家構造およびその変動、とりわけ地政学の影響に注目し、(2) 国民党政権が多民族的族群（エスニック・グループ）の社会空間をいかに管理したのかを考察し、(3) 被植民者の能動性（agency）、つまり先住民自身の声と行動に光を当てるという方法を採る。これらを通じて、世界史と台湾史の文脈における台湾の先住民族の歴史的特質を把握し、戦後における「先住民族」形成と構成について再検証し位置づけを行うと宣言する（7頁）。

第一章では、第1節「日本統治期の理蕃」で台湾総督府による先住民族統治の変遷を概観し、近代国家管理システムに先住民族が編入された過程を確認する。第2節「戦後の台湾山地行政」では、戦後初期の国民党政府による三民主義にもとづく辺境政策の展開、台湾省行政長官公署に

よる山地行政の接收・再建の過程を検討する。そして第3節「二二八事件と山地治安の管理統制」で、二二八事件における先住民族の動態とそれに対する山地の治安統制およびその影響を論じる。著者は本章で、台湾総督府と戦後中華民国政府の先住民族統治の連続性を論じた松岡格の研究²に対して、両者の連続性の過度な強調は、戦後における山地行政の制度改変が自然の成り行きあるいは進化の結果であったという誤解を生じさせると批判し、著者自身の見方を示す。すなわち、戦後初期山地行政の変遷は、日本統治期の特殊な山地行政のあり方を保留にしたまま三民主義辺境政策の「地方自治」理念を実現しようとして、「一般化」と「特殊化」との間で揺れ動いた結果とみる。そしてこれを、前者の上への後者の「積み重ね layering」として理解すべきだと説く(71頁)。この分析は、本書の重要な論点の一つである。

第二章は、戦争状態と地政学の観点から1950年代の先住民族統治について検討する。第1節「台湾の軍事化と山地の治安」は、戒厳令と戦争下での山地管制の誕生、「山地青年服務隊」と「国軍山地団」の組織化による先住民族の軍事動員について詳述する。第2節「国家統合と山胞論」では、1950年前後の「山胞」代表による政府高官の表敬訪問、「山地同胞」歌舞団による軍隊慰問、「山地巡廻文化工作隊」による政治宣伝活動、「生活改進運動」、党国体制下での「山地党务」組織化、先住民族を中華民族の一支とみなす「山胞論」とその喧伝について詳述し、先住民族の政治動員のあり方を論じる。第3節「党国体制下の先住民政治」では、二二八事件後にプマ出身の国民大会代表南志信(Sising)が先住民族の総称に「台湾族」を提唱し、ツォウ出身の嘉義県鳳凰郷長高一生(Uongu 'e Yata'uyungana)らが「高山自治区」を構想するなど、先住民族の主体性の発露が認められたことを指摘する。また、タイヤル出身の医師・政治家の林瑞昌(Losing Watan)、南志信、高一生らが山地開発と福祉の促進を目指して1948年に発足させた「台湾省山地建設協会」は、省政府幹部が多数加わることで、結果的に国民党支持者動員のための有力組織になったという。その後、林瑞昌、高一生ら先住民の政治指導者が白色テロによって粛正され、先住民族居住地区(「山地郷」と「平地郷」)に設けられた特殊な選挙制度により国民党と先住民政治家との間にはパトロン・クライアント関係が生まれた。これらから、日本統治期に「先覚者」と目された先住民の政治エリートは、戦後初期に民族の主体性や自治をさまざまに模索したが、権威主義的党国体制下の政治によりその芽が次々と摘まれたことが明らかにされる。

第三章は、冷戦構造下の山地開発と殖民のあり方を論じる。第1節「山地開発の提議と資源調査」では、終戦前後の山地開発の動向をふまえ、中華民国と米国とが共同設立した「中国農村復興聯合委員会」(農復会)が戦後台湾の人口急増に応じて山地開発のための土地・資源調査を1950年代初頭から漸次実施した過程を述べる。第2節「農林境界土地開発と退役軍人の配置」では、1954年の行政院国軍退役官兵輔導委員会(退輔会)設立、中部横貫公路建設、その沿線の土地・資源開発、退役軍人を配置した山地の農場と東部の開発、それらによる先住民への影響について詳述する。第3節「60年代における先住民経済の転換と都市先住民」では、山地郷での保留地測量調査、東部の経済開発と東部先住民族の経済状況の変化について述べ、それらが都市居住の先住民の出現をもたらしたことを論じる。このような動向の背景には、米国による援助の減少、輸出指向型工業への転換など、台湾の政治経済の変化が存在した。結果として、これらの殖民政

策が従来の族群による空間的棲み分けを切り崩し、人口移動を生み、山地経済を平地の資本主義経済体系へと組み込み、先住民族をさらなる被支配と搾取の立場に陥れたと結論する。

第四章では、前章で述べた山地開発と殖民が1960年代後半から1970年代において先住民族に引き起こした影響、問題、危機を論じる。まず第1節「経済変化の後遺症」では、1960年代の山地開発による先住民族経済の資本主義化にともない、依存と周縁化の傾向が生じたことを、土地の流失、負債の増大、貧困化、先住民女性の性の商品化、児童労働などの諸観点から論じる。第2節「先住民『国語世代』と都市ネットワーク」では、「山地平地化」政策のもとでの先住民の高等教育機関への進学率上昇、それにともなう先住民青年たちによる都市でのネットワーク形成、都市先住民が抱える諸問題への関心の高まりという一連の過程が詳述される。第3節「理想と幻滅：台湾山地独立案の顛末」では、1971年に花蓮で蒋介石父子批判の貼り紙が発見された出来事を契機とし、「台湾山地独立運動案」なる事件がねつ造された顛末を詳述する。この頃、都市で学び先住民が抱える種々の問題を憂慮し「山人」としての主体性を芽生えさせた青年たちが、新聞や雑誌に意見表明するなどの動きが見られた。しかし彼らは上記事件によって次々と無実の罪で逮捕され、その後も監視の対象となった。結果として、この時代においても、先住民族の知識人が連帯して声を上げようとする動きは、国家の暴力により抹殺されたことが明らかにされる。

第五章は、1980年代の先住民族運動がいかなる社会的・歴史的脈絡のなかで生成したのかを1970年代初頭から1980年代初頭に焦点を当てて論じる。第1節「山へ、田舎へ、奉仕に行こう：大学・専門学校山地服務隊の出現」では、1970年代の若者による社会奉仕運動の潮流を背景として、「山地服務隊」と呼ばれる先住民への奉仕活動を旨とするサークルが大学・専門学校に次々と誕生し、そこで非先住民と先住民との交流と相互関心が生じた過程を詳述する。第2節「山地問題の発掘と周知」では、この時代の山地服務隊と人類学者による調査報告や研究が、先住民族の抱える社会問題を具体的に明るみにした一方、それらによる批判や社会改革の訴えには限界があったことを指摘する。第3節「本土化に向かう台湾：族群という議題の浮上」は、1980年前後の党外民主化勢力の成長によって地域と族群の概念が社会的議題となり、「大中国（漢族中心）主義」に対する批判が生じ、そのなかで先住民族が中国文化に対して最も他者性を備える存在として注目され始めたという一連の過程を論じる。そして、日本統治期に創られた「呉鳳」神話への批判が、先住民青年のアイデンティティ形成に大きな影響を与えたことを指摘する。第4節「覚醒から行動へ：先住民族運動の誕生」では、先住民の知識人青年による雑誌『中国論壇』への投稿、『高山青』創刊、「台湾原住民権利促進会」の設立という先住民族運動に至る一連の過程を詳述する。その途上では人類学者や長老教会の影響もあった。

結論では、以上の各章の議論を「地政学下における先住民族の再植民地化」「先住民族による自律性の追求」という2点に分けて総括し、課題を述べる。課題の一つは、2000年代以降の中国の台頭後、中国の統一戦線工作の対象が先住民にも及んでおり、台湾の先住民族には複雑で多様な選択肢がもたらされているという点である。著書はこれについて、台湾で生活する者がみな共同で立ち向かうべき課題であり挑戦だと述べる。さらに、著者自身の今後の研究課題や方向性

が示され、本書は閉じられる。

3. 本書の意義

著者自身が何度も強調するように、本書の大きな意義は、先住民族の戦後の歴史経験を、政策や経済状態の変遷のみならず、その背後にある国共戦争、東西冷戦という東アジアと地球規模の地政学の文脈においてとらえ直し、このような特殊な政治状況のもとで先住民族の再植民地化が進んだことを明確に論じたことにある。すなわち、国防のために山地管制が布かれ、制度化された政治的・軍事的動員によって先住民族は党国体制に組み込まれ、退役軍人向け経済政策のために空間的棲み分けや生活のあり方そのものにも大きな変化がもたらされた。結果として、先住民族は資本主義経済に編入され、都市居住者を増大させ、種々の困難を抱えるようになった。このような歴史的経緯が、政策・法制度の変遷との関係において具体的かつ体系的に明らかにされた。

地政学的な視点の導入によって明らかにされたもう一点は、国家の暴力性であろう。先住民族自身があずかり知らぬ次元で生じた国家間の対立や駆け引きが、先住民族に対する無意味で理不尽な弾圧や粛正を引き起こしたのであり、1950年代と1970年代、2度にわたって試みられた先住民エリートによる主体性の追求や自治の模索は、それにより無残にも潰えた。評者は本書を読みながら、この点について幾度も無念さを覚え、嘆息せざるをえなかった。

これに関連してもう一つ挙げておくべき本書の重要な意義は、著者が先住民自身の声と行動、著者の言葉という能動性（agency）に注目した点である。過去の複数の年代において、先住民知識人はそれぞれ先住民族の境遇を嘆き憂い、よりよいあり方を模索して声を上げ、連帯を試みようとしていたという事実を、本書は具体的な資料とともに明るみに出した。とりわけ、従来の研究では注意が向けられてこなかった1970年代に光を当てたことの意義は大きい。1950年代、1970年代、いずれの試みも国家の暴力に封殺されたが、そのような先住民族による抵抗とも呼ぶべき動きが断続的に生じていたのだという事実は重みを持つ。十分に達成されたとは言い難い先住民族の脱植民地化をめぐり、今日なお努力を続けている多くの人々にとって、この点は大きな希望と励ましになるであろう。

また、1970年代以降の台湾の置かれた国際環境と地政学の変動にともなって台湾社会のあり方そのものに変化が生じるなか、先住民族への関心が高まり、先住民知識人もその影響を受けるといふ相互関係が生じたという指摘がなされたことにも注意を向けておきたい。1980年代前半における先住民族運動の誕生が、台湾社会の本土化や民主化運動と深い関わりをもつことが、具体的に明らかにされたのである。

付言しておかねばならないのは、本書の議論が、歴史学の研究手法に基づき、幅広い史資料の駆使によって成立していることである。著書が本書で参照した資料には、先行研究やそれによって編纂された史資料、過去の新聞や雑誌に加え、国史館、国史館台湾文献館、国家発展委員会檔案管理局などの諸機関が所蔵する一次史料が多数含まれる。とくに檔案管理局の史料の多くは、従来機密扱いとされ、近年ようやく公開されたものであろう。これらの一次資料は、2000年以

降に進められてきた先住民族と白色テロとの関係についての研究蓄積とともに、本書の重要な土台を成している。また、著者自身の調査によるものも含め、少なからぬ先住民のオーラルヒストリーも参照・引用されている。さまざまな先住民諸個人に対して、すでに多くのオーラルヒストリーが蓄積されてきたことを、評者は本書を通じて実感した。加えて、本書に収録された 50 枚を超える図版や 25 の表は、読者の理解のための一助として大きな効果をもつ。

以上のような点からいえば、本書は、著者が論じた 1970 年代以降の台湾社会における先住民族への関心、共存や和解へのさまざまな取り組み、とりわけ 2000 年以降に台湾の政府と学界が歴史的不正義をめぐる行ってきた情報公開と学術研究の基礎のうえに成立した書であり、その蓄積のうえに新たな視角をもたらした研究として評価できるだろう。

4. 残された課題

評者は近年、自身の研究課題の一つとして先住民族の現代史を設定してきた。その過程で本書に出会い、さまざまな疑問を解消し、多くの知識と視角を学んだ。以下では評者が考える今後の課題について触れておきたい。もっとも、著者は結論において、本書では論じきれなかった課題を周到に列挙しており、以下はそれらともおおむね重複する。その意味では屋上屋を架すことになるが、評者自身の問題意識として、ここに記しておく。

本書の主題が集会的で汎先住民族意識を有する「先住民族」の形成過程であったためであろうが、そこに含まれるさまざまな主体への目配りが必ずしも十全になされたとはいえず、その点では若干の物足りなさを覚えた。

例えば、第三章で論じた経済開発については、東西横貫公路や退役軍人を配置する農場の建設が進んだ中部山地の事例を挙げた。一方、管見の限り、南部山地ではこれほど大規模な開発とそれにともなう人口移動は生じなかったものの、生活の困窮や都市への人口流出は同様に生じたように思われる。そのような地域による差異や共通性について、今後さらにミクロな視点にもとづく研究によって、検討がされるべきであろう。

また、著者が取り上げた先住民の声や行動は、オーラルヒストリーも含めて知識人層のものが中心であり、その意味では、村に残り続けていた人、都市で下層労働者として生活した人、都市や遠方で働いた後に村に戻った人など、さまざまなライフコースをたどった多くの一般の人々の姿は見えづかった。女性についても同様である。そのような人々の生のあり方について、どのような手法でアプローチができるのかも含めて、今後検討されねばならない問題として残されているように思う。

おわりに

本書は、先住民族の現代史研究であると同時に、先住民族の経験に焦点を当てることで、戦後の台湾に君臨した権威主義国家の暴力性、それを成立させた戦争状態や冷戦構造に対する鋭い批

本書の刊行後、著者は先住民族の白色テロに関わる個別の事例研究をはじめとして、次々と台湾の先住民族の現代史研究を進めている。今後の著者の研究のさらなる進展に期待したい。それとともに評者自身は、日本に研究拠点を置く者として、そして人類学を専攻する者として、どのような研究が可能でありまた有効なのかを考えていきたい。

1 顧恒湛「再殖民、地緣政治与抵抗：戰後台灣原住民族形塑之研究（1945～1984）」國立政治大學台灣史研究所提出博士論文，2019 年。

2 松岡格『台灣原住民社会の地方化：マイノリティの 20 世紀』研文出版、2012 年。

|||||

吉田真悟著

『台湾語と文字の社会言語学 記述的ダイグラフィア研究の試み』

三元社、2023 年、246 頁

中国語史における文字改革運動とのつながり

藤井 久美子

第 1 節 はじめに

「あとがき」に書かれているように、本書筆者が台湾に留学したのは 2006 年で、本土言語教育として台湾語が小学校で教え始められてまだ間もない頃であった。その後、2015 年に大学院に入学するまでの間は研究から距離を置いていたからこそ、この約 10 年間に変わった事、変わっていない事がいっそうよく見えたという。中でも筆者が注目したのは台湾語である。

詳細は本書に書かれているが、台湾社会において、台湾語は、その名称はもちろん、文字・正書法についても試行錯誤が続いている。議論は徐々にある種の方向に収れんしつつあるように見えるが、それは、現時点（2025 年）でそう感じているだけで、この後どのような変化が生じるかは不明である。だからこそ、筆者自身、本書の最後に「台湾語の文字使用に関して短中期的な予測には言及しても、長期的な見通しについては論じなかった」と記している。とはいえ、ある時点での一定のまとめは重要である。

本書は、特に 21 世紀以降、台湾社会のなかで存在感を増し、また、筆者のいう「ナショナルアイデンティティとしての台湾意識」と強く結びついて論じられる台湾語が、これまでにどのような歴史を歩み、また、現在はどのように捉えられ運用されているのかを詳細に知ることのできる一冊である。評者の立場からは本書刊行の意義は特に次の 2 点にあると考える。まず 1 点目は、これが日本語で書かれているということである。本誌の読者のなかには中国語の方が良い、という方もいるであろうが、日本には台湾に関心を持つ一般の人々も多い。そうした読者層には本書はやや難解かもしれないが、それでも、「台湾語」といわれるものが何かを日本語で正確に知るには非常に有用である。2 点目は、筆者が「1.2. 研究の目的と位置付け」（p.6）に記すように、（台湾語に関する）「論争や主張からは距離を取り、外国人研究者としての立場から可能な限り客観的な記述研究を目指している」ということにある。これは日本語で書かれているからこそ実現できたことかもしれない。筆者が「完全に中立的な立場から論じるのは不可能であるということは自覚した上で、なおそうあろうと意識し努める」（p.6）ことで、幅広い立場、意見を集めることができたからこそ、本書は幅広く多様な人々の手にわたって活用されることが期待されるのである。

第2節 本書の概要

本来ならば、書評を書き進めるにあたってはまず目次を示すべきかもしれないが、出版社のHP (<http://www.sangensha.co.jp/allbooks/index/559.htm>) に詳細が掲載されていることから、紙幅の都合上省略する。まずは各章を評者なりにまとめておきたい。

「第1章 序論」についてである。本書の理論的裏付けとなるダイグラフィア研究につながる言語と文字（種）に関連する先行研究の言説を紹介したのち、研究の目的を「現代台湾語における文字使用の様相を、社会言語学的観点から記述すること」であり、目指す所は「書記言語としての台湾語は、2020年代の現在でも規範形成の只中にある」として、「こうした複相的かつ動態的な書記言語を対象として、そこでの文字の使われ方、及びその背後にある力学を明らかにすること」であると述べた。「文字論」と「民族誌（エスノグラフィー）」という2つの研究の枠組みに近い立場からの考察がなされていることから、両者の中間的研究として「リテラシースタディーズ」の一つとも位置付けられるという。具体的な研究手法としては、量的方法も織り交ぜたテキスト分析に加え、面接（インタビュー）調査という質的方法も用いられており、全体として、異なる視角や手法を組み合わせ対象を立体的に描く三角測量（トライアングレーション）を試みている点を筆者は本書の特色として挙げている。本書のキーワードである「ダイグラフィア」の概念・潮流については、先行研究の類型化の後、「一つの言語の表記に複数の文字体系が使用されること」とする広義を採用し、「社会とその書記体系の関係をより良く理解する一助」となるような記述的ダイグラフィア研究を目指したとのことである。

「第2章 台湾語とその表記」では、本研究の対象である台湾語とは何かという最も基本的かつ重要な部分について、事実とすでにある知見が整理された。第1節では、台湾の歴史からみた「台湾語」の誕生と今日に至るまでの諸相を、続く第2節では、台湾語の概要として、言語学的特徴と「台湾語」が有する名称の多様性を確認することができる。第3節では、本書のテーマである台湾語の表記の歴史とそれらの表記をめぐる論争が詳細かつ明瞭にまとめられた。本書が考察の中心に据える20世紀後半からの「台湾語文字規範論争」に欠かせない重要な考え方である「全漢」（全て漢字で書かれた文章）、「全羅」（全てローマ字のもの）、「漢羅」（王育徳や鄭良偉が提唱した漢字ローマ字交じり）について、非常にわかりやすく整理、説明されている。本章では、漢字やローマ字といってもその表記は同一ではなく、漢字には中国語内の既存の字を転用した借音字や訓用字以外に新造字があり、他方、ローマ字には教会ローマ字、TLPA、通用拼音、台羅拼音があることが示されている。その他に、方音符号や注音符号も台湾語の表記に用いられていることが具体例をもって示された。第4節では、本書と直接かかわる3点の先行研究（臧汀生（1996）、張學謙（2003）、Klötter（2005））の詳細が取り上げられた。

続く「第3章 使用領域と文字」では、量的方法を採用して考察する対象として、学校教科書、雑誌、歌謡曲の歌詞、言語景観という4つのテキストが選ばれた。

学校教科書は、他と比較すると歴史も浅いが、義務教育という公的制度を通じて年々読み手が量産されている。制度としての公教育が前提にあることから、文字の規範化への志向が強く表れ

るのではないかとこの前提に立ち、考察が行われた。林初梅（2009）を引用しつつ、2003 学年度と 2017 学年度の比較が詳細に進められた。本書が取り上げる近年（2017 学年度）の動きに注目すると、発音記号については、台羅拼音が教育部の名の下で策定・発表されたことに起因して公的な威信がより強力に付与されて通用拼音よりも優勢となっており、また、漢字は全て教育部漢字に準拠し、漢字・ローマ字共に標準化が進んでいることが明らかにされた。

次に、台湾語雑誌は、本書によれば、教科書とは異なり、民間で発行されたものとして言語運動に関わる人々に実践と交流の場を提供することで運動を支えているという。自由な出版が解禁された 1987 年の戒厳令解除後には続々と台湾語雑誌が創刊され、当初は教会ローマ字による漢羅が主流を占めていたが、台羅拼音が生まれた 2006 年以降はローマ字の主流は台羅拼音へと移行し、教会ローマ字は全羅文での使用に限定されるようになった。ローマ字表記法は、その後も台湾語雑誌において重要な論点となり続けている。

第 3 節の「歌謡曲の歌詞」というものは、規範意識、使用領域において教科書や雑誌とは異なる存在である。歴史的にみて台湾語歌謡は民衆が台湾語の文字を目にすることのできる数少ない媒体であった。先行研究（臧汀生他）によれば、台湾語歌謡曲の歌詞は基本的に全て漢字で表記されてきたが、その使用は「自由放任」で不統一でわかりにくいものであったという。しかし、こうした状況も、教育部の「臺灣閩南語常用詞辭典」が刊行されることでいくらか収れんに向かっているようである。とはいえ、歌詞カードに書かれた台湾語で使用される 4 つの否定辞（漢字表記）の具体的分析からは、教育部の影響以前に、不統一な中にも緩やかな規範とでも呼ぶべき傾向がすでに形成されていたことが明らかにされた。

第 4 節では、台湾内の主要都市の街路でみられる台湾語言語景観を詳細に調査し、分析した。本書が分析対象とした 4 つのテキストのなかでは、外国人も含めて誰もが台湾語表記を最も目にする可能性の高いものであろう。現代台湾社会においては中国語の方が相対的に「無標」であるのに対し、中国語とは異なる漢字の使い方をすることで台湾語標識を「有標」たらしめている場合が多いという。本節ではさらに、「遊びの要素」として、掛け詞やいわゆる「火星文」（日本という「ギャル文字」に近い概念で、見掛けが地球の言葉ではないようだ、との注がある）についても分析がなされた。

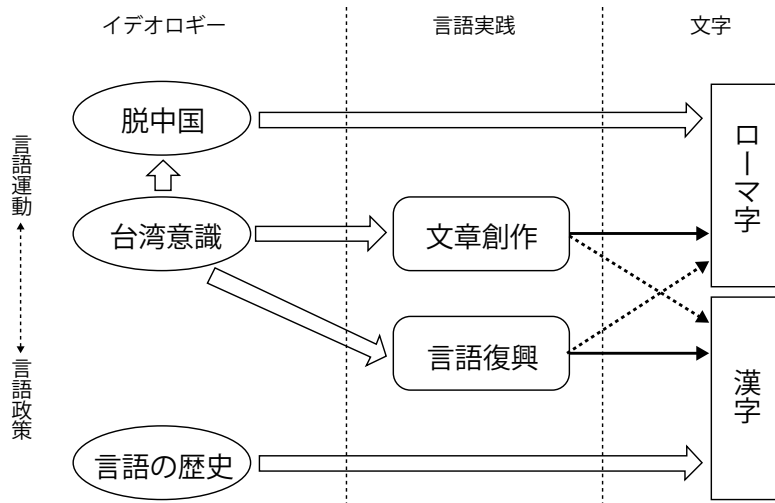
第 5 節では、こうした 4 つのテキスト形態の様相から台湾のダイグラフィアの実態をまとめるにあたり、序章で提示された「ローカルリテラシーズ」（私的、日常的な読み書き実践）と「支配的リテラシーズ」（教育や法、宗教や職場における読み書きのように、公式な制度と関連付けられるもの）という概念が用いられた。「学校教育」（教科書）と「言語運動」（雑誌）が正書法への志向が強い支配的リテラシーズ寄りの使用領域であるのに対し、「大衆文化」（歌謡曲の歌詞）と「社会・経済活動」（言語景観）はそれが比較的弱いローカルリテラシーズ寄りであることが説明された。現在では、正書法を志向する学校教育と言語運動の領域では、漢字はほぼ教育部漢字に統一されつつあるが、一方で、発音記号としての使用も含めたローマ字は、台羅拼音が主流となりつつも、学校教育では通用拼音、言語運動では全羅志向とつながる教会ローマ字も依然として使用されているとのことであった。

「第4章 言語イデオロギーと文字」は、本書で重要な位置を占める質的方法として取り入れられた面接（インタビュー）調査を用いた考察にあたる。最初に、先行研究の分析を通して、本書での「言語イデオロギー」概念の定義を「主に個人の中で意識的に抱かれる、言語に関する思想や考え方」と明示した。調査対象は、感染症で渡航がかなわなかった時期にオンラインで実施した1名も含めた10名で、pp.154-155に調査者の氏名や面接日などの詳細が記されている。使用言語は、相互信頼感（ラポール）醸成のためできるだけ台湾語を用いるよう努めたが、一部で中国語も使用したとのことである。面接調査の対象は、使用領域でいえば言語運動に属する書き手が多いが、台湾語の言語（文字）政策に関わった言語学者2名も含まれている。

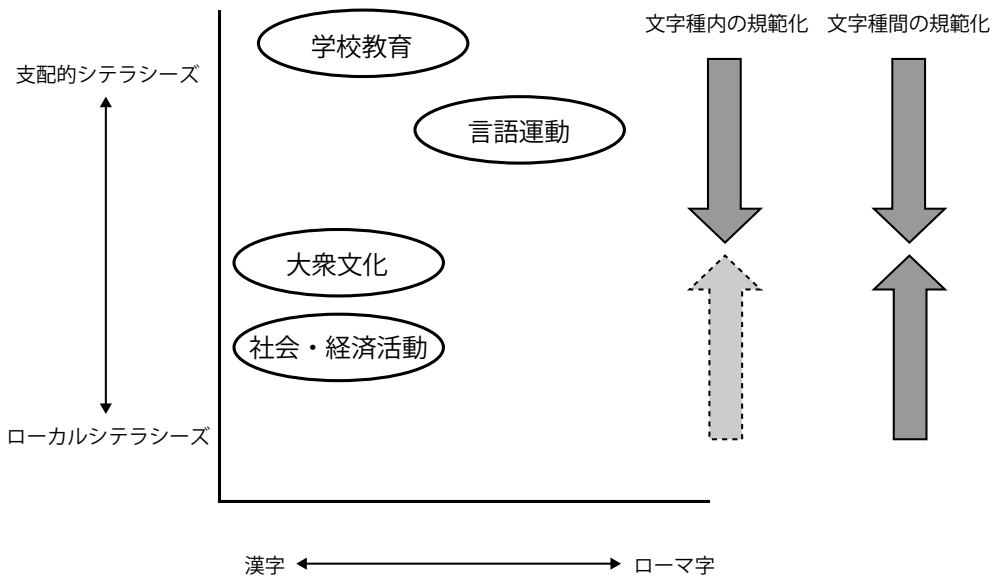
本調査は仮説生成型調査に近い側面を有しつつも、ある程度の予想を立てていた問題もあったという。その一つが、漢字とローマ字の選択とナショナルアイデンティティの関係についてである。筆者は「台湾意識」をナショナルアイデンティティとしての文脈から捉え、台湾語文字化の実践（あるいは主張）と結び付けてインタビューを分析した。これまでの議論とつながる点はまさに漢字かローマ字かということである。ローマ字の多用が漢字を中国（語）に属するものとして排除するイデオロギーに基づいているのに対して、漢字を台湾（語）の一部と考え、むしろローマ字を外来的のものとして排除するイデオロギーが漢字多用の背景に存在するのではないかと予想していたという。しかし、この点については、書き手のうちの6名への調査結果から、文字選択は、ナショナルアイデンティティとしての台湾意識に基づいて台湾らしさを追求する過程で採る戦略の違いによるものであると結論づけた。

ローマ字については、学習効率からみる考え方と共に、「道具」か「道具以上のもの」かという文字をめぐる根本的な議論がある。それは台羅拼音をめぐる議論においてもさまざまであった。しかし、台羅拼音が勢力を拡大できたのは、こうした対立を決定的な亀裂にすることなく、言語復興運動のために譲歩したり変容したりしたことで乗り越えたからであるという。現代の書記方法には、ローマ字表記の問題とは別に、手書きだけでなく、キーボードを打って画面上に文字を表示するということがある。入力方法は単なるシステムの違いではなく、入力そのものが台湾語表記の問題と直結するのである。今回の調査対象には言語学者もおり、こちらは言語の歴史や系統関係に重きを置いて台湾語の表記法について考えていることがわかった。但し、台湾語との関わり方が異なる「言語運動に携わる書き手」と「言語政策に携わる言語学者」という二者はそのグループごとに同一の見解を持つわけではなく、それぞれの内部でも意見は異なっていて、また、互いに排他的なわけではないことも明示された。

結論に入る前の第5節では、「ダイグラフィアの深層」としてまさに本書のまとめが示された。ここは、筆者による「図 4.5-1: 言語運動／政策におけるイデオロギーと文字の関係」(p.203)と「図 4.5-2: 台湾語におけるダイグラフィアと文字の規範化（改訂版）」(p.206)を用いて総括しておきたい。



「図 4.5-1: 言語運動／政策におけるイデオロギーと文字の関係」 (p.203)



「図 4.5-2: 台湾語におけるダイグラフィアと文字の規範化 (改訂版)」 (p.206)

図 4.5-1 にある中抜き太白矢印は両者の結びつきを示す。但し、筆者によれば、両者の関係性は矢印が示す単一方向にのみ流れるわけではなく、また、例えば、「台湾意識」から出る3つの矢印について調査協力者の多くが2つ以上の方向に伸びているというように、いずれか一つとつながるわけでもない。文字との関係性を示す矢印の違い（実線か点線か）は、主体性の濃淡と使

用の多寡による差を示したものであるという。

図 4.5-2 の方は、第 3 章 p.146 の図 3.5-2 を改訂したものである。右側の矢印を 2 つに分類し、規範化の流れを示す矢印も上からのものだけでなく、下から上への流れがあることも示した。左下の矢印が点線で囲まれてやや薄い色であるのは、文字種(漢字とローマ字)の規範化においては、基本的には上から進行しているのだが、一部で下からの流れが存在しているからであるという。

最後に、「第 5 章 結論」では、本書が第 1 章で目指すとした「社会とその書記体系の関係をより良く理解する一助」となるような記述的ダイグラフィア研究に向けてまとめがなされた。事例研究の総括としては、台湾語にかかわる言語イデオロギーの多様性が改めて整理して示された。理論的貢献の可能性としては、ダイグラフィアにおける規範化は文字種内と文字種間に分けて考える必要があり、文字種の混用はかなり普遍的な現象といえるものの、語の持つ意味内容の重さと、表意文字か表音文字かという文字の性質とが結びつくのは漢字圏特有の現象であるとの指摘もなされた。台湾語のような少数言語は「一つの言語」として対象化されるために正書法を志向するが、こうした事項を研究する際に欠かせないのは、「〇〇語」か否かという議論が生まれるのは多言語社会であるがゆえであり、当該言語が使用される社会の優勢言語との関係を抜きにしては論じることができない、という視点なのである。

第 3 節 コメント

以下ではいくつかコメントを残しておきたい。

本書は、出版された時点で、台湾語に関しては量的にも質的にも非常に大部の知見が集約された社会的意義を有する書籍といえる。ただ、本書の書評が掲載された他誌(『社会言語学 XX Ⅲ』2023, pp.165-174)では「台湾華語」との関係が指摘され、筆者からもこの点については「応答」がなされていることからわかるように、台湾内の他の言語(筆者による李喬の引用を用いるならば、「原住民語、客家語、北京語」など)についての言及は非常に少ない。台湾語の文字選択や正書法に焦点をあてた研究に対する「ないものねだり」かもしれないが、漢語との関係性において同様に「方言」とみなされる客家語は、台湾華語同様に今後、台湾語の位置付けに影響を与えうるものであろう。客家語をめぐる議論が台湾語に与える影響の可能性についても、将来的に考察が進められることを期待している。

実は、本書で論じられる台湾語の表記をめぐる漢字とローマ字の論争やナショナルアイデンティティについて、評者が最も強い関心を抱いたのは、中国語そのものの文字改革論争と同じような議論が展開されている点であった。改めていうまでもないが、「文字改革」運動とは、清朝末期 19 世紀末頃から中国大陆で展開されることになる中国語の改革論争のことで、『『文字』改革』と呼ばれてはいるが、文字のみの改革に止まらず音声についても議論された。欧州との交流によって生じた言語改革の試みだけでなく、欧州からの影響で先に言文一致運動などが隆盛していた日本からも変革の波を受けたことがわかっている。本書筆者も、例えば第 4 章で紹介する言説のなかに、日本における明治期の漢字廃止論で言われた教育コストの問題を挙げる調査者がい

たり、また、日本留学を経て日本の文字改革運動を知って台湾語の表記法に対する視野を広げた事例があったりすることを紹介しており、この点においても、中国の文字改革と同様の状況が展開されていることがわかる。

表記法として漢字とローマ字のどちらがふさわしいか、といった議論がなされる時に出された両者の特徴も、次のような点で台湾語表記法をめぐる議論と似通った論点を有する。漢字については、漢字のなかのどの表記法を採用するのか、「約定俗成」（本書 p.190 にもあり）をどう考えるのか、歴史があれば尊重されるべきといえるのか、といったことが持ち出されるのは 100 年前と同様である。他方、ローマ字については、教会ローマ字に始まる歴史性、次には中国語のローマ字は文字か表音記号かの議論、そして、文字としては、習得が早い（学習効率が良い）、科学的である（外来語を挿入しやすく、科学や技術を導入するのに適している）、先進的である、国際性があるといった特徴を有することが言われている点も、まるで同じ道を歩いているかのようである。「全漢」「全羅」「漢羅」をめぐる、さまざまな意見や個人のなかでも多様な主張が存在するのは、さも、銭玄同（1887-1939）がかつて中国語の表音文字化を目標にかかげるも、その前になすべきこととして、語法の規定、辞典の編成があり、だからこそまずは漢字を簡略化する必要があると述べたのと類似している。また、実際にその実践が同時代の人々によっていくつかの雑誌で行われ、現実にも普及していったことがあり、学校でも教育用に使用されることが政府によって定められた、というのも、台湾語をめぐる議論に対して既視感を覚える一因であろう。さらには、こうした議論が、国家アイデンティティと結びついた表記法改革である点も酷似している。21 世紀の台湾の言語状況を研究するのに 19 - 20 世紀の中国の文字改革研究は不要なようにも思えるが、現状、中国語と切り離して論じることができない限りは、中国語そのものの文字改革論争についての理解を深めることは台湾語研究にとっても有意義なものであろう。今回の 10 名の調査対象も台湾の知識人階層として、意識のレベルに差はあれ、中国語の文字改革論争についての知識から影響を受けていたかもしれないと感じた。

では、中国語そのものの文字改革がその後どのような道を歩んだかは歴史が物語る通りである。評者は時折、20 世紀に中国語がもしローマ字化を成し遂げていたら 21 世紀の世界はどうなっていたらと想像してみることがあるのだが、シンガポールのように、歴史的に国家アイデンティティがある意味では漢字とは切り離された（マレー語圏にあるといった）特殊な状況にない限り、漢字が示す存在感はこれからの台湾社会においても無視することができないように感じる。台湾は、現在、そのシンガポールを英語とのバイリンガル政策の参考としているのだから、ますます複雑である。

最後に、評者は筆者に、これからも長くこの分野の研究を続けて、未永く台湾社会、台湾語を見続けることを願っていることを伝えたい。筆者よりも 20 年近く前に台湾の言語政策、言語状況に関心を持った評者自身は、1990 年代初頭の状況を見て、台湾では「國語」が普及し、これからはこの「國語」が揺らぐことなく社会の中心で用いられるのであらうと考えた。それから約 30 年が経過して、現在の台湾社会を見ると、依然「(かつての) 國語」は国家言語の中心的地位にはあるが、しかし、一方で、台湾語や客家語などの地域言語が以前とは比べ物にならないくら

いに台頭している。ずいぶん前、公共空間で「國語」以外のアナウンスを最初に聞いた時には衝撃を受けたものだが、それも今や当たり前になっている。したがって、自身の研究を根本から問い直す作業が求められるのだが、これぞ、時事問題を研究する者にとっての醍醐味であり、苦難であろう。賢明な筆者は本書では「長期的な見通しについては論じなかった」と述べているが、今後はこの点についても中国語そのものの文字改革を参考に大胆に論じて欲しいと思っている。

|||||

松岡格著

『植民地統治下の台湾原住民－近代国家による統治と社会の可視化－』

(東京大学出版会、2024 年、V + 296 頁)

「可視化」という統治実践が台湾原住民社会にもたらしたものとは

松田 京子

はじめに

本書は台湾原住民研究の分野で、刺激的な議論を展開している松岡格による最新の著書である。松岡は 2012 年刊行の著書『台湾原住民社会の地方化－マイノリティの 20 世紀－』(研文出版)において、「地方化」という切り口で、日本統治期から戦後の国民党統治期にかけての台湾原住民社会の不可逆的な変化を実証的に明らかにしている。ここで展開された論点に、さらに「可視化」という観点から光をあてて、その分析を深化させたのが本書『植民地統治下の台湾原住民』だといえよう。以下では、まずその概要について紹介したい。

本書の概要

まず本書は、第 1 部、第 2 部と 2 部構成となっており、第 1 部には 3 つの章と補論 1、補論 2、第 2 部には 3 つの章と補論 3 が配置されており、第 1 部では植民地統治期の特に台湾原住民が居住する地域社会の統治に、第 2 部では特に台湾原住民そのものの統治に焦点が当てられている。そして、さらにその後の展開として、各部に配置された補論が、国民党統治下の状況として論じられるという構造になっている。

具体的には、まず第 1 部「台湾原住民社会の可視化」の第 1 章「近代国家による統治と可視化」において、本書の考察の中心対象である日本統治期の台湾原住民居住地域「蕃地」(「特別行政区域」)の状況について、漢民族系住民が暮らす「平地」(「普通行政区域」)とは異なる統治が行われ、「日本統治時代を通じて地方行政機関がおかれることはなかった」という基本的な状況が説明された上で、さらに著者は、しかし植民地政府は「蕃地」に対しても、「地域内の住民全体に対して、排他的で網羅的な統治」の徹底を目指す「近代国家的な統治」を及ぼそうとしたとする(8 頁)。その上で、そのような統治の徹底を図る上で、外部からやってくる統治者にとって、統治対象地域は、状況が見通せない不可視の存在であり、まずその「可視性」を挙げることが必要不可欠になるとする。そして、そのような「可視化」の方法として、「統計をとる、という方法」、「土地所有状況の確定、という方法」、「身分登録という方法」が主要なものであったとされ(15 頁)、この後の章の中で、これらの方法が「蕃地」の「可視化」をどのように促していたのかが具体的

に論じられることとなる。

第2章「[蕃地]の可視化と地図、公的書類」では、まず清国による台湾原住民居住地の統治の状況が、1874年の「台湾出兵」をめぐる日本・清国間のやりとりを通じて説明されている。すなわち日本が「近代的領土観にもとづく直接統治の有無」(21頁)を問題にしたのに対し、清国は「台湾全体は清朝の領土であるが、その領土内に住んでいる原住民は統治対象外」(22頁)という前近代的な領土観で応答するという形で両者の領土観の違いが浮き彫りになり、結果的に「台湾出兵」をめぐる日清間のやりとりは、統治をめぐる前近代の国家による論理が、近代国家の論理に置き換わっていく状況を体現していたという。このように台湾原住民居住地に対する実行支配は清国統治下では確立していなかったわけだが、日本による植民地統治が開始されても、台湾原住民居住地（[蕃地]）に対する実行支配の確立には約20年を要し、1910年代中頃になったとされる。すなわち佐久間左馬太総督のもとで1910年から行われた「討伐」服従化施策である「五箇年計画理蕃事業」の遂行によって「蕃地」の実行支配は確立したとするわけだが、著者によるとそれ以前の「蕃地」は「不可視」の地域であり、まずは地図の作成による「可視化」が命がけで行われたとされる。

具体的には、「蕃地」の実効支配確立以前の領台初期から植民地政府は、「探検隊」などと称して台湾総督府関係者を「蕃地」に派遣するが、本書では特に台湾総督府技師・野呂寧による1910年代の「蕃地」の測量と地図製作に関わる「探検」が取り上げられ、彼らの調査活動が原住民の襲撃や気象の激変という危機に直面しながらも、「蕃地」を「可視化」するツールとしての地図製作がいかに進められていったかが説明される。その上で例えば1913年に「タロコ族」居住地に対して行われた野呂らによる調査は、地形測量という目的に沿いつつも実は「タロコ族」に対する「討伐」作戦の準備であったことが指摘される。つまり、「討伐」を貫徹させるためには、それまで原住民社会にとっての「安全」を守っていた外部からの「不可視性」を取り除く必要があり、原住民に対する「討伐」行動と「可視化」が同時平行的に行われたことによって、「蕃地」の実行支配が確立されるが、それは「安全のイニシアティブが、原住民社会から植民地当局へ、地域社会から国家に引き渡されたタイミングでもあった」(32頁)という示唆に富んだ指摘を著者は行っている。

そして「蕃地」の実行支配が確立する前後から、植民地政府は「蕃地」の各所に駐在所を設置していくことになるが、「特別行政区域」である「蕃地」において、駐在所は治安維持に重きを置きながらも、様々な統治行為を行う「統治ステーション」として機能したと著者はいう。そして「蕃地」の各駐在所に備え付けられた「須知簿」などの書類は、管轄下の原住民集落に関する重要な情報をまとめた記録簿として原住民社会の「可視化」ツールとしての役割を果たしたという。その中でも「身分登録書類」は「可視化」ツールの典型的なものであったと指摘されるが、「普通行政区域」である「平地」（漢民族系住民居住地）で編成された「戸口調査簿」が1933年に日本の戸籍と同格とみなされ身分公証書類としての役割が高まったのに対して、「蕃地」では1943年以前には「戸口調査簿」の作成はなされなかった。しかしそれに類しながらも例えば「刺墨」の有無などの独自項目を付加した「蕃人戸口簿」が作成されており、これらを通して「特別

行政区域」である「蕃地」にも、一元的な行政体系への組み込みを目指して、植民地政府は「可視化」のための断続的な働きかけを続けていたと著者は主張している。

次に第3章「もう一つの可視化と原住民の生業構造の改変という施策」では、第2章で言及した「可視化」と比べて、より統治対象に直接的に働きかけ、変化をもたらす「可視化」として原住民集落の政策的移住が取り上げられる。その具体例として、①複数の集落が政策的移住によって統合された例として「サンティモン」（「パイワン族」）の一集落と「カト」（「ブヌン族」の一集落）の事例、②すべての集落を「平地」に移すという形で大規模な集落配置の変化を伴う政策的移住が長い時間をかけて実施された「南澳蕃」（「タイヤル族」の一部族）の事例が紹介されている。そしてこのような政策的移住によって、新集落の空間構造は駐在所を中心に構築されるなど政治的秩序の置換が行われ、さらに焼畑農耕から定着農耕へ、そして稲作普及・水田造成という生業構造の改変を牽引したと著者は論じている。

その上で第1部には補論が2つ、配置されており、補論1「視覚的秩序と可視化」では、本書で頻出する「可視性・可視化」「視覚的秩序」という概念についての補足説明が行われ、さらに台湾原住民社会に即した事例として、第3章で言及された集団移住について、移住後の新集落の例が取り上げられ説明されている。すなわち視覚的秩序が明確な「可視性」の高いものとして、碁盤の目の形で道路が整備され、そこに家屋が整然と建ち並ぶ「南澳社」（「南澳蕃」の移住先）の例などを挙げながら、外来者である植民地官僚が持ち込んだ視覚的秩序と、原住民社会の中の「地域知」に基づく生活の秩序の関係性について論じている。さらに補論2「可視化が何をもたらすのか」では、植民地統治期に生活上必要な土地として設定された「高砂族所要地」を起源とする「保留地」に対して、戦後に実施された施策とそれが原住民社会にもたらした影響が検討されている。具体的には「保留地」に関する土地所有権は1980年代に「発生」するが、所有権の付与を前提として行われた1950年代・60年代の土地測量・土地登記のプロセスの中で、国民党政府が意図していなかった変化として、土地測量が家単位で行われたため「分戸」化が起こり、家族規模の縮小と核家族化が急速に広がった事例を、「ブヌン族」に即して紹介している。さらにそれまでの自然物には靈魂が宿っているという世界観に基づいた土地に対する伝統的な観念が大きく変化し、土地が「商品」として見なされるようになり、その結果として土地の所有権が原住民社会の外へ流出する事態が生じた事例を紹介しながら、このような変化は資本主義体制への原住民社会の組み込みという日本統治期以来の長期的な動向の中で把握すべきだと指摘している。

次に第2部「身分登録と臣民統合」では、全体的に第2章で言及された「身分登録書類」に、より焦点をあてて議論が展開されている。まず第4章「身分登録の二面性と身分の多元性」においては、植民地台湾における身分登録の歴史が漢民族系住民に対する制度も含めて概観された上で、台湾原住民を対象とした身分登録に関しては先述の「蕃人戸口簿」への記載を通じて段階的に進められていったが、1943年の「戸口規則」の改正によって、「特別行政区域」である「蕃地」も、「普通行政区域」と同様に「戸口調査簿」が編成されるようになったことを大きな画期として指摘している。その上で、「臣民」という意味での「法的人間」として原住民に対応するとい

うこと自体は、「蕃地」の実効支配が確立した 1910 年代後半以降、段階的に進められていったが、1943 年の上記の法改正によって、正式に原住民に法的人格が認められるようになったと著者は主張している。そして本来、身分登録には治安維持と結びついた「可視化」ツールとしての側面と、国民としての権利の行使に関わる身分公証の側面があるが、原住民には「いわゆる権利と義務いずれも与えられておらず」、前者にのみ力点が置かれていたが、1943 年以降は「正式に法的人格が認められて最低限の権利が与えられるとともに、徴兵の対象となる、という変化があった」(147 頁) とする。

また第 5 章「臣民統合と資源の流用」においては、さらに「流用」という概念を用いて、台湾原住民の「可視化」が持った意味が説明される。著者は「流用とは、地域住民の所有する、または生み出す資源の一部を、例えば徴収するというかたちを通して国家が直接利用できるようにすることを指す」(177 頁) と定義した上で、その具体例として徴税と徴兵に即して検討する。その上で第 2 章、第 4 章でも言及された 1943 年の「戸口規則」の「蕃地」への全面適用は、「原住民を正式に臣民として認めることで、正式に流用の対象とする措置」(188 頁) であったとし、そこには戦時中の兵員確保という時代状況が色濃く反映していたとする。しかし、「蕃地」居住の原住民には「公課」が免除されるなど、原住民と漢民族系住民の区別は残されており、日本統治期全般を通じて、制度上の統一は達成されなかったということがここでも確認されている。

その上で第 6 章「身分登録書類の記載項目としての「姓名」」では、身分登録において重要な要素となる「姓名」について、台湾原住民社会の伝統的な命名文化に基づく「人名」には、とりわけ「姓」の部分で、日本の戸籍が前提としている「氏」とはそぐわないものであったとする。そこで原住民の人名登記は、原住民の命名法に基づき「人名」をカタカナで記載するという形で進められたが、特に 1939 年以降、原住民の「人名」について日本式姓名への改姓名が行われていくことになったとする。そのことは、無文字社会であった原住民社会に、植民地政府が設置した学校での教育などを通じて、読み書き文化が浸透していく状況とも強く関連しながら、原住民の伝統文化に大きな変化をもたらしたという。とりわけ 1943 年の「戸口規則」の全面適用によって、「戸口調査簿」に日本式姓名で、原住民の「人名」が記載されるようになるが、しかし治安維持という観点、および「流用」の円滑実施という観点からも、「人名の表記を統一することで、特定の個人についての追跡可能性を高める」(218 頁) ことが重要であり、日本式姓名への書き換えは限定的であったとする。しかし翌 1944 年に原住民の改姓名は全面化したとされ、このような転換は、それまでのロジックからの大きな変化を伴うものであったとし、その背景には「[帝国臣民]としての義務としての従軍」(231 頁) という要素が深く関わっていたのだろうと著者は論じている。

最後に第 2 部の補論として補論 3「戦後「山地」監視体制と国家にとっての安全」が置かれている。ここでは、第 2 部の各章で扱われた身分登録による台湾原住民の「可視化」の問題が、戦後の国民党統治下でどのように展開したかが述べられている。具体的には、植民地政府が作成した身分登録データを引き継いだ国民党政府による戸籍行政の特徴として、1969 年から 1992 年までの長期間にわたって、それが民政機関でなく警政機関に編入された（「戸警合一」）ことにある

とする。この背景には治安維持の論理があり、それは戦後長らくの間、「山地」（「蕃地」を引き継いだエリア）に入境管制が実施されたこととも深く関連しており、とりわけ対外的治安維持を念頭においた国家安全保障の前線であると「山地」が見なされたためであるとする。このような状況の中で、「国民」監視体制の確立という要素を伴いながら、「山地」に対して日本統治期には実現されなかった一元的地方行政体系への組み込みが実現したとする。その上で、戦後台湾においては「制度的多元性が取り払われて台湾住民がおしなべて「国民」とみなされた」（247 頁）が、そのことを台湾原住民に即していえば「「国民」としての流用・権利付与の対象となるとともに、やはり戸籍データをもとに認定される原住民身分カテゴリー特有の流用・権利付与の形として、流用については免税などの優遇が適用されるとともに、事実上は、国家安全保障に巻き込まれるという対価を払った、とみることもできるかもしれない。……戦前のような身分について制度的な多元性は取り払われて「国民」身分に統一されたのであるが、それでも多元性は残った、ということもできるだろう」（256 頁）と結論づけている。

本書の意義とコメント

本書を通読して印象に残るのは、日本統治期、とりわけ 1910 年代後半以降、実行支配が一定程度確立した後の「蕃地」およびそこで暮らす台湾原住民に対して、植民地政府が行った統治実践を「可視化」という視点から位置付け直そうとする著者の強い意思だ。周知のように、日本による台湾の植民地支配の特徴の一つは、主に漢民族系住民が居住する「平地」を「普通行政区域」、台湾原住民が居住する「蕃地」を「特別行政区域」として、異なる支配体制を敷いたことにあるが、とりわけ 1930 年の霧社事件以降、「蕃地」および「蕃地」居住の台湾原住民に対して、日常生活の細部にまでわたる「内地化」が進められていった¹。著者は 1910 年代後半以降、「蕃地」に対する制度的一元化を植民地政府は目指していったとし、前書ではそのような動向を「地方化」と名付け、主に「パイワン族」と「ルカイ族」に対する諸施策を事例として実証的に論じているが、本書ではそのような営みを台湾原住民社会の「可視化」として捉え直して論じている。本書で言及される台湾原住民の集落に対する集団移住政策や「蕃人戸口簿」の性質、1943 年の「戸口規則」改正の影響そして改姓名の状況などについては、1996 年刊行の近藤正己による先駆的な著作の中で、すでにその制度的枠組みと実態が論じられており²、その後も台湾原住民統治史研究の中でしばしば言及されているが、本書における著者の試みは、植民地統治期の台湾原住民に対する施策とその実施の状況が、「種族」ごとに多様性をはらみ複雑な様相を呈する中で、その全体的な動向が、「近代国家による統治」というより大きな枠組みの中で、どのような意味を持つのかを描き出そうとする意欲的なものと解釈した。また本書が大きな影響を受けたとされるジェームズ・スコットによる「可視化」をめぐる議論、身分登録による個人の「可視化」と個人の主体化＝服従化との関連にかかわるジュディス・バトラーやピエール・ルシャンドルの議論をはじめ、本書の各所に時には煩雑に感じるほど本書の考察の理論的背景が紹介・説明されているが、このような記述のあり方は、日本統治期の台湾の「蕃地」で起こっていた状況を孤立させるのではな

く、近代国家による地域支配および個人の支配という議論の地平に広げていこうとする試みの現れとして評価すべきものであると思われる。

その上で、本書の問題点をあえて挙げるとすれば、本書の主要な論点である台湾原住民社会の「可視化」という現象は、著者が前書において「地方化」という観点との関連で、すでに適切に指摘した実態を指すものであり、本書では身分登録の問題により焦点をあてて詳細に論じているものの、やや焼き直しの議論であるという印象を拭えない点が惜しまれる。その点で、例えば第3章および補論1で論じられた台湾原住民に対する集団移住政策によって、規律化された景観をもつ新集落が出現する状況や、そのような状況に対し日本人の知識人の中からも新集落が原住民の健康に悪影響を及ぼすという批判の声が上がる問題など、本書の元となった個別論文³では、その実態がより詳細に論じられており、補論1で取り上げられた事例を補論ではなく本論に組み込み再構成する形で本書に盛り込めば、より重厚な記述になったのではないかと思われる。この集団移住政策に関して、「サンティモン」の事例は前書でも取り上げられているが、「南澳蕃」については著者の丁寧な実地調査に基づき、本書で新たにに取り上げられた事例でもあり、とりわけ本書でも言及されている「南澳蕃」のピヤハウ社については、日本統治初期から植民地政府との間で様々な衝突と妥協を繰り返しており、その社が最終的に「平地」に移住させられるというプロセスについては、台湾原住民社会の「可視化」を考察する上での重要な事例として、より掘り下げて論じる価値があったのではないかと思われる。さらに「可視化」のツールとしての身分登録の問題が、本書の第1部第2章と、第2部全体にわたって論じられているが、かなり記述が重複している箇所もあり、本書の構成としてさらに工夫する余地があったのではないだろうか。以上、本書の書評の最後として、いくつかの問題点を列挙したが、本書の完成度を高めるという観点からのものであり、著者のさらなる研究の発展を期待したい。

注

- 1 松田京子『帝国の思考－日本「帝国」と台湾原住民』(有志舎、2014年)。
- 2 近藤正己『総力戦と台湾－日本植民地崩壊の研究－』(刀水書房、1996年)。
- 3 松岡格「可視化、視覚秩序と景観：台湾原住民に対する政策的移住を中心に」(『マテシス・ユニウェルサリス』第21巻第1号、2019年)、同「台湾原住民集落の「整理」と「農業改善」：集落と生活様式に対する国家的要約」(『マテシス・ユニウェルサリス』第21巻第2号、2020年)。

////////////////////////////////////